

三枚続

泉鏡花

青空文庫

表紙の画えの撫なで子しこに取添とえたる清書きよがき草紙、まだ手習てならい児この作し
なりとて拙つたきをすてたまわずこのぬしとある処ところに、御名おんなを記し
せたまえとこそ。

明治三十五年壬寅正月

鏡花

「どうも相済みません、昨日きのうもおいで下さいましたそうで毎度恐入ります。」

と慇懃いんぎんにいいながら、ぼりかんを持つて椅子なる客の後うしろへ廻ったのは、日本橋人形町通どおり、茂きつた葉柳はやなぎの下に、おかめ煎餅せんべいと見事な看板を出した小さな角店を曲つて、突つ当あたりの煉瓦れんがの私立学校と背合せせなかになっている紋床もんどこの親方、名を紋三郎といつて大の怠な惰者まけもの、若い女房かみさんがあり、嬰あかんぼ児も出来たし、母親おふくろもあるのに、東西南北、その日その日、風の吹く方にぶらぶらと遊びに出て、思い出すまでは家うちに帰らず、大切な客を断るのに母親おふくろは愚痴おぼろになり、女房は泣声になる始末。

またかい、と苦にが笑わらいをして、客の方がかえつて気の毒になる位、別段腹も立てなければ愛想も尽かさず、ただ前町の呉服屋の若旦那が、婚礼というので、いでやかねての男おとこ振ぶり、玉も洗つてますます麗あでかに、雫しずくの垂る処で一番綿帽子と向合おうという註文で、三日前からの申込を心得ておきながら、その間際に人の悪い紋床、畜生め、か何かで新道しんみちへ引外ひっぱずしたために、とうとう髭ひげだらけで杯をしたとあつて、恋の敵かたきのように今も憤おこつて

いるそればかり。町内の若い者、頭分、芸妓家待合、料理屋の亭主連、伊勢屋の隠居が法然頭に至るまで、この床の持分となると傍へは行かない。目下文明の世の中にも、特にその姿見において、その香水において、椅子において、ばりかんにおいて、最も文明の代表者たる床屋の中に、この床ツ附ばかりはその汚さといったらないから、振の客は一人も入らぬのであるが、昨日は一日仕事をしたから、御覧なさいこの界限にちよつと気の利いた野郎達は残らず綺麗になりましたぜ、お庇様を持ちまして、女の子は撫切だと、呵々と笑う大気焰。

もつとも小僧の時から庄司が店で叩込んで、腕は利く、手は早し、それで仕事は丁寧なり、殊に剃刀は稀代の名人、撫でるようにそつと当ってしかも布を裂くような刃鳴がする、と誉め称えて、いずれも紋床々と我儘を承知で鬚にすする親方、渾名を稻荷というが、これは化かすという意味ではない、油揚にも関係しない、芸妓が拜むというでもないが、つい近所の明治座最寄に、同一名の紋三郎というお稻荷様があるからである。

「お前どこかでまた酒かい。」と客は笑いながら、

「珍しくはないがよく怠惰けるなあ。」

「何、今度ばかりや仲間の寄でさ、少々その苦情事なんでして、」

「喧嘩か。」

「いいえ、組合の外ほかに新床が出来たんで、どうのこうのって、何でも可いいじゃあがあせんか、お客様は御勝手な処へいらつしやるんだ。一軒殖ふえりやそいつが食ゆつて行くだけ、皆みんなが一杯まんまずつお飯まんまの食分まが減まるように周章あわてやあがつて、時々なんです、いさくさは絶えやせん。」

「それじゃあ口でも利かされたのかね。」

「ならば大名の方かたなんでき。」

「それに何も二日ふたひかかることはないじやないか。」

「すつかり御存ごぞんじだ。」と莞爾にっこりする。

「だつておい四度たびすがえり素帰すかへりをしたぜ、串戯じょうだんじやあない。ほんとうに中洲なかずからお運び遊あそば

すんじやあ、間に橋はし一個ひとつ、お大抵おほたいではございませんよ。」

「おや、母親おふくろがいつた通り。」

「貴客あな、全あくなそう申ますんでございますよ。」と長火鉢ながひばちの端はが見みえて、母親おふくろの聲こゑがする。

「ははははは、旨くやりましたね、（ほんとうに中洲からお運び遊ばすんじやあ間に橋一個、お大抵ではございません。）ツさ、え、旦那、先刻親方が帰りました時に内のお婆さんがその通りいいました。ねえ、親方、どうですお婆さん、寸分違わねえ、同一こツたい、こいつあ面白えや。」と少しかすれた声、顔をしかめながら嬉しそうに笑ったのは、愛吉といつて、頬に角のある、鼻の隆い、目の鋭い、眉の迫った、額の狭い、色の浅黒い、さながら悪党の面だけれども、口許ばかりはその仇気なき、乳首を含ましたら今でもすやすやと寐そうに見えて、これがために不思議に愛々しい、年の頃二十三四の小造で瘡きすなの、中形の浴衣の汗になった、垢染みた、左の腕あたりに大きな焼穴のあるのを一枚引掛けて、三尺の帯を尻下りに結び、前のめりの下駄の、板のようになったのに拇指で蝮を拵えたが、三下という風なり。実は渡り者の下職人、左の手を懐に、右を頤にあてて傾きながら、ばりかんを使う紋床の手をその鋭い眼で睨むようにして見ているのであつた。

客は向うへ足を伸して、

「そうだろう、人情は誰も同一だから言うことも違わないんだよ。」

「じゃあ何だ、内の母親おふくろもやっぱり同一ようなことを言つてましよう、ふふん、」と頤うなずを支えたまま、頤うなずくがごとくに言つて笑えみを洩もらす。

紋床は顔ななめを斜ななめに、ぼりかんに頬をつけて、ちよいと撓ためて、

「馬鹿をいいねえ、お前めえと同一ななめにされて耐たるもんか、人情かは異わらないでも遣やり方が違つてらあな、おい、こう見えても母親にやまだ米の値を知らせねえんだが、どうだ。」

「あれ、あんなことをいうよ、のうお積まき。」と母親は傍かたわらなる女房に言葉かたわらを渡したらしい。

「ほほほほ。」と、気の無さそうに若い女が笑つた、と思うと嬰あかんぼ児あかんぼがおぎやあと泣く。紋床はぼりかんの齒すかを透すかして、フツと吹き、

「おつとまず黙つてあとを聞くことさ。さよう米の値は知らせねえが、そのかわりしめだか高しめだかで言訳しめだかをさせますか。」

「違えねえね。」

「黙れ！ 手前てめえが何だ、まあお聞きなさいまし、先生。」

客はこの近ちかまわり辺ちかまわりの場所には余り似合あわぬ学生風、何でも中洲に住んでるとより外くわ悉くわしくは知らないが、久しい間の花主とくで紋床はただ背後うしろの私立学校で一科目預あっている人物と心得こころえで、先生、先生と謂いうが、さにあらず、府下銀座とおり、通となる某新聞なにがしの記者で、遠山金之助

というのである。

「どうぞごさいます、この私わっしに意見をしてくれろつて、涙を流して頼みましたぜ、この愛おふくろの母親が、およそ江戸市中広しといえども、私が口から小可こつばずかし愧くもなく意見が出来ようというなあ、その役介やっかいもの者ばかりでさ、昔だと賭場とばの上へ裸でひっくり返ろうという奴やつこなので、」

「何を、詰らねえ、」

「いいえ賭博ばくちは遣りません、賭博は感心に遣りませんが、それも何幾いくら干かありやきつとはじめるんです。それに女にかからずね、もつともまあ、かかり合をつけようたつて、先様が取合わねえんですからその方も心配はありませんが、飲むんです。この年とし紀で何と三升酒を被かぶりますぜ、可おッそろ恐しい。そうしちやあ管を巻いて往来でひっくり返りまさ、病やまいだね。愛、手前その病気だけは治さないと不可いけねえぜと、私わっしあこれでも偶たまにやあ親身になつていうんです、すると何と、殺されても恨まないから五ごんつく合買つとくんない、とこうでしょう、言種いんぐさが癪しゃくに障るじやありませんか。」

愛吉は何にもいわず、腕を拱こまぬいて目を外そらして、苦言一針するごとに、内々恐縮うなじすくの頸うなじを窘すくめる。

紋床は構たなわず 柵たな下おろし、

「活いきるか死ぬかというこれが情婦いろだつたつて、それじや愛想つかを尽つしましょう、おまけにこれが行く先ゆは、どこだつて目上の親方おやぢばかりでさ、大て概えげえ神しん妙びようにしていたつて、得て難癖がが附つこうてえ処ところでその身持みぢじやあ、三日と置くきづ氣遣かひはありやしません。もつとも三日なんて置おこうものなら、はじめの日は朝寝あさねをして、次の夜よは内うちをあけて、三晩目さんばんめには持遁もちにげをしようというもんだ。」

「まさか、」といつて客の金之助かねのすけは仰向あおむけに目を瞑ねむる。

愛は小指こさゆびのさきで耳みみ朶たぶをちよいと搔かいて、

「酷ひどいなあ、親方おやぢ。」

「まあそういつた形かたちよ、人情おんなじは同一おんなじだから、」

「何が人情、」

「そうじゃないか、だつてお前めえ真似まねをするにも好いいことはしたからねえだろう、この間も

ね、先生、お聞きなさいまし。そういう風だから山手も下町も、千住の床屋でまで追出されやあがつて、王子へ行きますとね、一体さきさき渡がついてるだけにこちららの稼業はつきあいが難かしゆうがす、それだのにしばらく仕事をさしてもらおうというその初対面の許で、宿の中ほどの硝子戸をあけると、突然、私あ忙しい身体でござえして……とこうせ。

どうです言種は、前かど博徒の人殺兇状持の挨拶というもんです。それでなくツてさいこの風体なんですもの、懐手でぬツと入りや、真昼中でもねえ先生、気の弱い田舎なんざ、一人勝手から抜出して総鎮守の角の交番へ届けに行こうというんでしよう。

この頃は閑だからと、早速がりを食って奴さん行処なし、飲んだ揚句なり、その晩はどうとうお宮の縁の下に寝ましたツさ。この真似もまた宜しくねえてね。

仕方がねえんで舞戻つて例のごとく親方済みません、が呆れたもんです。そうして私が忙しい体でござえして、とこういう塩梅に遣ツつけました。目を円くして驚きやあがつて、可笑しゆうがしたぜ、飛んだ面白えやと、それを嬉しがっていやあがる、始末におえねえじゃアありませんか。それがまた似合うんです、ちよいとこんな風、」と紋床も好

事なり、ばりかんを持ったままで仕事の最中。

「成程、」と行って金之助も故とらしく振返った。

愛は極悪げに、

「親方沢山だ、何も身振までするこたありません。」と愛くるしい件の口許で、べそを搔くような（へ）の字形。

「私にや素直だから可愛いんですがね。どうだこう改つて言われちゃあ余り見ツとも好いこつちやあるめえ、ちつと気をつけるが可いぜ、え、愛的。」

「可いやさ、罷違えばという覚があるから世の中を何とも思わんだろう、中々可い腕があるんだつていうじやあないか。片腕ツていう処だが、紋床の役介者は親方の両腕だ、身に染みて遣りや余所行の天窓を頼まれるツて言っていたものがあよ、どうだい。」

「へ、……どういたして、こうなると私あ極が悪い、」と面を背けて、たじたじになった罪の無さ。

「ここらで発起をすることつた、また三晩ばかりあけたというじやあないか。あのここな、」
 というのがちと仮声になりかけたので、この場合吃驚し、紋床は声を吞んでくすりと笑う。

「ですがね親方、今度ばかりや、」と愛吉は屹と真面目。

四

「どうした。」

「ええ、何ね、少し面白くねえ、馬鹿に癪なことがあつて、腹が立って、私あ腹が立ってならねえんで、」と愛はいう内にもその迫つた眉を動かすのであつた。

紋床は、しばしばあつて、珍しからぬ、愛吉がかかる様子に馴れて、いうことを何とも思わず、

「妙だな、お前また腹が立って為様がないから、そこで身体を寝かしていたらう。」

「親方、茶かさずにさ、全くだね、私あ何だ、演劇です敵ツてもものはちようどこんなものだろうと思いませんぜ、ほんとうに親の敵。」

「可い気なことを言つてらあ、お前母親は死んでやしねえじやないか、父爺の敵なら中気だろう、それとも母親なら、愛的、お前がその当の敵だい。」

「何だつてね。」

「苦勞をさせるからよ。」

「氣が早いや親方、誰も権太左衛門に母親が斬られたとは言やしません、私あ親の敵と思
う位、小癩こしやくに障る奴やつが出来たツていうんです。」

「はてな。」

「それでね、出来るものならふん捕づかまえて畜生撲なぐりころ殺してやろうと思つて、こう胸ツくそ
が悪くツて、じつとしていらねえんで、まったくでき、ふらふらして歩ある行いたんで。」

「待ちねえ、おい、お前感心だな、ははあ解つたい、そうするとお前は大望のある身体からだだ、
その敵討をしようという。」

「そうですよ。」と真顔でいった。

「そうですよもねえもんだ、何だな、それがために浮身を窶やつし、茶屋場の由良さんといつ
た形で酔潰よいつぶれて他愛々々よ。月が出て時ほととぎす鳥なが啼くのを機掛きっかけに、蒲鋒小屋かまほこやを芻上はねあげ
て、その浴衣で出ようというもんだな、ははははは。」

「ようがすよ、もう沢山だ、何もそんなに改つて今日という今日、脂を取んなさるこたあ
ねえ、食潰くいつぶしの極道にやあ生れついて来たんだもの、天道様だつて数の知れねえ人形を
拵こしらえるんだ、削けずりくず屑も出まさあね、」と正直なだけに怒りッぽい、これでもまだ若いん

だから、愛吉は拗ね気味で横を向く。

「ほい、気に障ったら堪忍しねえ、言つたつて治らねえ位のこたあ知ってるんだい、言葉の機よ、己だつてまだ人に意見を言う親仁形は役不足だ、可いや、喧嘩なら加勢をしよ、對手は何だ。」

「そ、それがね親方、」とたちまち嬉しそうな顔色で、

「ちつと組合違いの人間でさ。」

「ふむ、船頭か。」

「いいえ。」

「馬士か。」

「詰らねえ。」

「まさか乳母どんじやあるめえな。」

「親方、真面目に聞いておくんなさいというに。聞くだけで可いんだから、私あまた話すだけでもちつたあ胸が透くだろうと思ふんで。へい、ここの処へ込上げて来やあがつて。」
と手を懐にしたまま拵げた胸に斜にかかつてる守の紐の下あたりを、はたはたと叩いて見せる。

「可^よし可^よし、私が聞こう、どうしたんだ。」

「先生、聞いておくんなさるか、難^{ありがて}有^あえ、こりや先生だとなほわかりが早い、対^{あいて}手^てはね、先生なんざ御存じじやありませんか、歌の師匠ですよ。」

紋床は口を挟んで、

「ああ、中洲の清元の。なるほどこいつあ大望だ、親の敵より大^{おおごと}事に違えねえ、しかし飛んだ気になつたぜ、愛、お前^{めえ}ありやあ不可^{いけね}えや、まるで組合が違つてらあ。」

「何がえ、親方。」

「お津賀さんのことだろう。」

「ありや、師匠じやありませんか。」

「唄の師匠よ。」

「何を、私なあ味噌^{ひとこし}一^{ひとこし}漉^してえやつなんです。」

「味噌^{みそ}一^{ひと}漉^{もじ}? ああ三十一文字か。」

「その野郎だ。」と、愛吉は胸を張つた。

五

「歌の先生、三十一文字の野郎で、それが敵、へい、」とばかりで紋床も変に思い、金之助もその意を得ない様子である。

愛吉は熱心面おもてあうわに顕れ、

「先生、貴客あなた知っていらっしやりやしませんか、その三十一文字の野郎てえのを、」

「何というね、そしてどこの、」

「居る処は根岸なんで、」

「根岸か、」

「へい、根岸の加茂川わたる巨おツてんです。」

「加茂川巨。」と金之助は口の裡うちでその名を言った。

紋床は背後うしろへ廻まわって、

「神主様みてえだな。」

金之助は更あらためて打うち領うき、

「有名な先生だ、歌の、そうそう。書ても能よくお書きになるぜ。」

「知しつてますよ、手習師匠兼業やつしの奴やつしなんで、媽かかあ々あが西洋の音楽とやらを教おえて、その婆ばばあが

また、小笠原礼法 躰方、活花、茶の湯を商う、何でもござた娘子の好きな者を商法にするツていいます。」

「ははあ何でも屋だな、場末の荒物屋にやあ傘まで商つてら、行届いたものだ。虱でも買に行つて捻つてやれ、癖にならあ、どうせ碌な者は売るんじやあねえ。」と紋床は話が実で、ものになりそうな卵だと見て取ると、面白く大に煽る。

金之助は驚いて、

「馬鹿なことを言え、罰の当つた、根岸の加茂川と来た日にやあ、歌の先生でも皆が御前々々と言う位なもんだ。宴会のあつた時、出ていた芸妓が加茂川さんちよいと云つたら、売女風情が御前を捉えて加茂川さん、朋友でも呼ぶように失礼だ、と言つて、そのまま座敷を構われた位な勢よ。高位高官の貴夫人令嬢方、解らなけりや、上ツ方の奥様姫様方、大勢お弟子があるツさ、場末の荒物屋と一所にされて耐るもんか、途方もない。」

「何でも、馬車だの腕車だのが門に込合つてゐるツて謂いますね。」

「そうだろうとも。」

「何だか知らねえが癩に障るツたらないんです。」

と愛吉はさも口惜しそである。

「おい、その方が敵かい。」

「お前めえまた妙な敵を持ったもんだな、金と女わつしなら私わたしだって殺してえほど怨うらみがあらあ、先せんの中洲の清元の師匠の口だと、私も片棒担かつぐんだが、困ったな歌の先生じゃあ。お前めえどうした、狙ねらったか、」

「二晩ばかりつけました、上野の山ね、鶯うぐいすだに谷ステツキね、杖でも持ちやあがつて散歩とでも出掛けてみる、手前活てめえいかしちやあ帰さねえつもりで、あすこいらを張りましたけれど、出ませんや。弱よつちまいました、親方の前めえだけれども。髪結床かみいどこの下したじやく職しやくなんぞするもんじやアありませんね、せめて字でも読めりや何とか言つて近づくんですが、一の字は引張ひっぱつて、十文字は組違え、打ぶ交ちがえは鷹たかの羽だと、呑込んでいるんじやあ為方しかたがありません、私わたしもう詰つらねえ。」と力ちからなさそうに投首なげくをする。

「ああ、お互ふ互びんに不便ふびんなもんだ。」

「親方本当でございますね、酒の値は上りまさ、食たべる物は麵パン麩うなぎの附焼あたま、鰻うなぎの天窓あたまさ、串じょう戲だんぐち口くちでも利ここうてえ奴こもりツあ子守こもりツ児こかお三さんどんだ、愛あいちゃんなんてふざけやあがつて、よかよかの飴屋あめやが尻しりと間違えてやあがる、へ、お忝かたじけ。」といつて、愛吉はフンと棄鉢すてばちの鼻息。

「あいや、敵討のお武家、ちとお話が反れましたようですが、加茂川が何か君に恥辱でも与えたというのかい、」

「そうです、恥を搔かしやがったんで、対手は女ですよ。」

「何、女に恥辱を、待て、質の好くない奴だ。」

ちようど洗いましょうという処、金之助は膝を叩き、四辺を払って、ついと立った。

「や、先生も味方らしい、こいつあ、難有えぞ難有えぞ。」

六

戴いたのは新しい夏帽子、着たのは中形の浴衣であるが、屹と改まった様子で、五ツ紋の黒紹の羽織、白足袋、表打の駒下駄、蝙蝠傘を持ったのが、根岸御院殿寄のとある横町を入れて、五ツ目の冠木門の前に立った。

「そこです、」と、背後から声を懸けたのは、二度目を配る夕景の牛乳屋の若者で、言い棄てると共に一軒置いて隣邸へ入った。惟うにこの横町へ曲ろうという辺で、処を聞いたものらしい。加茂川の邸へはじめての客と見える、件の五ツ紋の青年は、立

停まつて前あとさき後みまわをして猶ためら予らつていたのであるが、今牛乳屋ちちやに教えられたので振向ひっこいて、「は、」と、頷うなずくと齊ひとしく門を開すかけて透すかして見る、と取とつ着つきが白木の新しい格子戸ひっこ、引込ひっこんで奥深く門から敷石が敷敷いてある。右は黒板塀くろばんべいでこの内に井戸、湯殿などがあるうという、左は竹垣たけがきでここから押廻おしまわして庭、向むかうに折曲まがつて縁側えんがわが見みえた。

一体いつもこの邸いの門前いには、馬車くるまか、俵わたか、当世このよの玉たまの輿こしの着きいていないことはない。居いまわ廻りの者ものは誰い謂いうとなく加茂川かものがわの横町よこまちを、根岸ねがしの馬車新道くるまにんみちと称とえて、その狭せまめられるために、豆腐屋油屋とうふあぶらやなど、荷やのある輩やからは通行つうぎょうをしない位くらいであるが、今日は日曜にちよう故ゆか、もう晩方ばんぱうであるためか、内も外も人少ひとすくなげに森しんとして、土塀つちべいの屋根やぐら、樹きの蔭かげなどには、二ツ三ツ蚊かみの聲こゑが聞きえた。

されば敷石しきいしを鳴ならす穿は物ぎものに音立ねたてて、五ツ紋ごもんの青わか年ものはつかつかとその格子戸かきものの前まへ。

ちようどここへ立たつた時とき分に、今開いまけた門かどの、からからと鳴なりる、ばねつきの鈴りんの音ねが止やんで、あたかも可よし、玄関げんかんへ書生しよせいが取次あらいに頭あられて、あえてものを言うまでもない。

黙もくつて、坐まつて、手てを支たいて、顔かほを見て、澄す澄すして控ひかえる。

青わか年ものは格子戸かきものを半はんば引ひいたままで、慇いん懃ぎんに小腰こゝろを屈かめ、

「御免ごめん下さいまし。」

「はい。」

「ええ、お友達、御免下さいまし、御当家、」と極きまつて切口上で言出した。調子もおおしく、その蝙蝠傘を脇挟んだ様子、朝ちようせき夕立入る在来の男女とは、太いたく行ゆきかた方を異ことにする、案ずるに蓋けだし北海道あたりから先生の名を慕つて来た者だろうと、取次は瞶みつめたのである。

青わかもの年はますます鄭てい重ちゆう、

「いかがでございましょうか、お友達、御当家先生様にお目めどおり通が出来ますでございましょうか。」

「貴方あなたはどちらから、」

「ええ、手前事は、ええ何でございまして、そのあれでございしますよ。」

「はい、」

人の内の取次というものは、いかなる場合にも真面目なものなり。

「お友達御免を蒙こうむります、手前はその日本橋人形町通り、勝山と申しまして、」

「勝山さん、」取次は聞き馴なれないという顔かおつき色。

「いえ、手前がその勝山と申すんじゃないやあございませんで、」

「ははあ、」

「御当家先生様の、ええ、お弟子でございまして、その勝山と申しますお嬢さんからちよいと頼まれました、手前使つかいの者でございます、少々お目に懸かかりとうございしますが、お宅でいらつしやいましょうか、お友達、お取次を願ねがいとう存じますんで、へい。」

「先生はお宅ですが、ちよいとお待ち下さい、」と妙な顔をして取次はくるりと入った、青年わかものは我を忘れた風でひよいとその頸うなじを縮すくめたが、立直つて、えへん内証せきばらいの咳一咳。

七

「さあ、こちらへ、私が加茂川で。はあ、」と仰向あおもむいて挨拶をする。これはあえて人を軽蔑するのでもなく、また自ら尊大にするのでもない。加茂川は鬼神おにがみの心をも和やわらぐという歌人うたびとであるのみならず、その気立が優しく、その容貌も優しいので、鼻下あぎと、頤ひげは貯たくわえているが、それさえ人柄に依つて威嚴的に可恐こわらしゆうはなく、かえつて百人一首中なる大宮人の生はやしたそのように、見る者をして古代優美の感を起さしむる、ただしちと四角な顔で、唇は厚く、鼻は扁ひらたい、とばかりでは甚だ野卑に、且つ下俗に聞えるけれども、静しずかに聞き召こしめせ、色が白い。

これで七難を隠すというのに、嬰兒あかごも懐なつくべき目附と眉の形の物やわら和わかさ。人は皆鴨川かもがわ（一に加茂川に造る、）君の詞藻は、その眉宇びゆうの間に溢あふれると謂いうのである。

かかる優美な人物が、客に達するに（はあ、）の調子で仰向やわらぎくとなつては、いささか性格において矛盾するようであるが、これをいう前に、その和やわらぎのある優しい一双の慈眼を（はあ、）と同時に糸のように細うしてあたかも眠るがごとくに装うことを断っておかねばならぬ。

その上にいかなればしかするかの理由を説明したら、ますます鴨川の奥床しい用意のほどが知れるであろう。

紋床でも噂があつた、なおこの横町を馬車新道と称とよえるので解る、弟子の数が極めて多い。殊に華族豪商、いずれも上流の人達で、歌と云えば自然十が九ツまで女流である。

そののみならず、令夫人が音楽を教えて、後室が茶の湯生花の指南をするのであるから。若き時はこれを戒いむる色いにありで、師弟の間でもこの道はまた格別。花のごとく、玉のごとき顔かんばせに對して、初恋しのぶこい、忍しのぶこい、互たがいにおもうこい思おもうこい、恋おれなどという、安からぬ席題を課すような場合に、どんな手てにをは爾遠波の間違が出来ぬとも限らぬ。人木石にあらず己おれも男だ、と何も下司げすにタンカを切つたわけではない。歌うたびと人が自分で深く慮おもんばかり、すべて婦人の弟子に對す

る節は、いつもその紅、白粉、簪、細い手、雪なす頸、帯、八口を溢れる紅、襦、帯揚の工合などに、うっかりとも目の留まらぬよう、仰向いて眼を塞ぐのが、因習の久しき、終に性質となつたのである。もつとも有数の秀才で、およそ年紀二十ばかりの時から弟子を取立てた。十年一日のごとく、敬すべき尊むべき感謝すべき心懸けであるから、音楽に長けたる鴨川夫人が、かつて弟子の中の一人であつたことをもつて、毫も先生の品行を怪んではならぬ。

世には夫人が、おもて向き結婚してから八月目というのに、女兒を流産したといつて、云々する者もあるけれども、經典に言わずや、鶴は相見てすなわち孕む、それ歌人はこの濁世に処して、あたかも鳶鳥の中における鶴のごときものであるから、結婚の以前、既に疾く児を宿さぬという数はあるまい、従つて八月で流産しないとも限らぬのである。夫人は名を才子という、細川氏、父君は以前南方に知事たりしもの、当時さる会社の副頭取を勤めておらるる。この名望家の令嬢で、この先生の令閨で、その上音楽の名手と謂えば風采のほども推量られる、次の室の葭戸の彼方に薔薇の薫ほのかにして、時めく氣勢はそれであろう。

五ツ紋の青年は、先刻門内から左に見えた、縁側づきの六畳に畏つて、件の葭戸を見

返るなどの不作法はせず、恭しく手を支いて、

「はじめましてお目に懸ります。」

八

「はあ、貴方がその勝山さんのお使？」と大人は紅革の夏蒲団の上に泰悠におわす。此方は五ツ紋の肩をすぼめるまで謹んで、

「さようでございます、へい。」

「御親類の方ですかね。」

「いえ、親類と申しますでもございませんが、ちと懇意に致しますもので、ついこの坂下まで手前用事で参りましたに就いて、彼家から頼まれて、先生様の御邸へ伺いますように、かねてお世話に相成ります御礼を申し上げますよう、またどうぞ何分お願い申し上げます、ことづかりましたんで、へい、めつきりお暑うございますな、」といいながら、袂を探ると白地の手拭を取出して額を拭った。

「はあ、何、それはわざわざ。」

「実は母親が参ります筈はずなんでございますが、一体このとかく病身な上、貧乏暇なし、手もございませぬ処から、相済みませんが失礼をいたしましたして、」といいかけてまた額の汗を。見る処人形町居廻りから使に頼まれたというが堅気かたぎの商人あきんどとも見えず、米屋町辺の手代とも見えず、中小僧という柄にあらず、書生では無論ない。年若には似ない克明な口上振、時々ものいいの渋るといい、何でも口うつしに口上を習って路々暗誦でもして来たものらしい。

かかる肌はだちがい違ちがいのものに対しては、鴨川大人口を開いて、あえて上五文字かみをも吐くに当らず、

「はあ、」とばかりである。

葭戸を下の方から密そつと開けて、大形の茶碗の底へ、ぽちり入った結構らしいのを、畳の上へすべにらすようにして客の前に推して据えた、高島田の面長で色の白い、品の可いい、高等な中形の浴衣、帯をお太鼓に結んだ十九ばかりの美人。

五ツ紋の青わかもの年ななめは、斜ななめにちよつと見たばかりで、はッと言って頭こうべを下げげ、

「恐入ります奥様、ええお控え下さいまし、手前から申上げます、日本橋区人形町通、」と俯向うつむいたまま手をついて言った。

茶を持つて出た美人は、敷居の外へ半分ばかり出しした膝を揃えて支いたまま、呆氣あつけに取られたが、上目づかいで鴨川の面を窺おもてうかがうと、渠かれは目を瞑ねむつて俯向きながら、頤あご髯ひげのむしやとある中へ苦笑を包んで、

「可よし、」と頷うなずいて見せたので、葭戸やまを閉たててすつと消える。

「小間使でありますよ。」と教えたが、耐たまりかねたか、ふふと笑った。青年わかものの茫然ぼんやり拍子抜ひらのした顔を上げた時、奥かたの方で女の笑声。

此方こなたは面を赤うして、手拭てぬぐを持った手を額かぶにあて、

「これはどうも、手前まへ不束ふつつかものでございます、へい、実は奥様にはお目に懸かかつてよく御礼をと申しつけられましたものでございますから。ええ、何でございましょうか、奥様はお邸やしやでいらつしやいましょうか。」

「はあ、居おりますよ。」

「いかがでございましょう、ちよいとお目に、」と御身おみぶん分柄ぶんがら、お家柄いへがら、総じては日本の国風を心得ないことを言うのである。

鴨川鴨川は眉ひそを顰ひそめたが、さあらぬ調子で、

「面会日は別にあるです。」

「へい？」

「あれが皆様に別に面会しますのは水曜の午後です。」

「水曜の午後でございますか。」

鴨川は至極冷淡に、

「はあ、」

五ツ紋の青年は何か仔細しさいありげに、不心服の色を露あらわした。

九

「ですが、何も別してお手間は取らせません、ちよいといかがでございましょう。」

「誰にも皆みんなそういうことになっておるですから、」

「へい、ごもつとも様ですが、そこん処をそのお繰合せ下さいまして。」

「たつてお逢いなさりたい!」と鴨川大人うしきつぱりとなる。

五ツ紋は慌てた形で、

「いえ、たつてと申す訳ではございせん。」

「そして何の用ですな。」と改まって尋ねられた。

「その勝山から託りましたので、奥様にもお目にかかつて御挨拶を。」

「はあ、何、それなれば別にお会い下さるにも及びませんですよ、私から申聞けましょう。そして遠い処をわざわざおいで下さるにも及ばんでした、貴方御苦労でしたな、宜しくどうぞ、ちとこれから出懸けんければならんですから。」

歌人の住居も早や黄昏れるので、そろそろ蚊遣で逐出を懸けたまえば、凶々しいような、世馴れないような、世事に疎いような、また馬鹿律義でもあるような、腰を据えた青年もさすがにそれと推した様子で、

「これはどうも飛んだお邪魔をいたしましたでございませう、勝山のあの娘も不束なものでございませうから、どうぞまた先生様、何分、」と、ここでまたびつたりと平蜘蛛。

「はあ、それは宜しい、」ともう片膝を立てそうにする。

青年も座を開いてちよいと中腰になったが、懐に手を入れると、長方形の奉書包、真中へ紅白の水引を懸けてきりりとした貫目のあるのを引出して、掌に据え直し、載せるために差して来たか、今まで風も入れなんだ扇子を抜いて、ぱらぱらと開くと、恭しく要を向うさまに畳の上に押出して、

「軽少でございますが、どうぞお納おさめを。」

と見ると金子きんす五千疋、明治の相場なにかしで拾円若干わざを、故わざと古風なにかしに書いてある。

「ああ、こういうことをなすつては可いけません、そのために、ちゃんと月謝つきせをお入れになることにしてあります。」

「さようおつしやりましてはお可はずか愧はしゆうございます、誠まことにお僮そまつ末まつで、どうぞ差置さしかれまし。」

「そうですか、皆みなさん様さんにもうかねてお断ことわりがしてあるんだのに、何かこういう御心配ごんぱいをなさるから困るよ、ああ、とかく御婦人方ごふじんかたは、」と云いながら、その細い目でふと葎戸わら戸の内を見着みけた。

「おお、お才、そこに……お前差支まへさしえがなくばちよつとお逢あいなさい、こちらで、」と声を懸かける。

「はい、」と案外あんがい軽い返事へんじ、さやさやと衣きぬの音がして葎戸わら戸越こに立姿たちかづが近ちかづいたが、さらりと開ひけて、浴衣ゆいがけの涼ひやしい服装ふくそう、緋ひの菱田ひつたが鹿かの子この帯揚おびあがりをし、夜会よかい結びの毛筋けすぢの通とつた、色いろが白い上に雪ゆきに香においのする粧よそおいをして、艶あでやか麗れいに座まに着きいたのは、令夫人れいふじん才子さいしである。

「いらつしやい、誰方どなた、」と可愛かわいい目で連合つれあいの顔かほをちよいと見る、年とし紀ぎは二十七ななじゅうしちだそう

だが、小造こづくりで、それで緋の菱田鹿の子の帯揚このみという好このみであるから、二十はたちそこそこに見える位、もつとも十九の時児ちこまげ鬘はすみに結あつた媛ひめで、見る者は十四か五とよりは思わなかつた。早朝上野うしろの不しの忍のばすの池いけの蓮見はすみに歩ある行あるいて、草の露つゆのいと繁かたきに片かた褌たづまを取り上げた白脛しらはぎを背後うしろから見て、既に成女の肉附であるのに一驚を喫くした書生しやうせいがある、その時分から今も相変あひからず、美しい、若々わかししい。

不意ふいの見げん参さんといい、ことに先刻さつき小間使こまぢを見てさえ低頭平身わかもした青年わかもの、何とて本尊ほんぞんに対して恐入おそいらざるべき。

黙もくつて額着ぬかずくと、鴨川大人かみづかは御自慢ごじまんの細君こまぎみ、さもあらんという顔色かおつき、ぐツと澄すして、
「勝山かつやまさんの使つかの方かたです。」

十

「そう、貴方あなたよくいらつしやいましたね、勝山かつやまさん、あのお夏なつさん、お変かりはないの、あ、ついこないだおいでなすつたのね。」ともつての外御懇ぐわいこんのお言葉。

「人形町にんがたからでは随分ずいぶんある。」と鴨川かみづかは打領うちうなずく。

「貴方もあの辺なんですか。」

青年わかものはやつと口が利けた。

「へい、近所でございました、」

「遠いんですね、腕車くろまでも随分暑かったでしょう、宅に居おりましても今日あたりはまた格別なんです、」といいながら純白な麻を細く襲かぎねた、浴衣でも上品な襟しじを扱うしろいて背後を振向き、

「定や、団扇うちわを持っておいで。」

小造な若い令夫人は声を懸けて向直ったが返事をしなかったので、

「貴方はほか憚りはばり様ですが呼よび鈴りんを、」とお睦まじい。

すなわち傍かたわらなる一閑張いっかんばりの机、ここで書見をすることも見えず、帙ちつ入いりの歌の集、蔣まきえ絵の巻まきた蓑ば入いれ、銀の吸殻落おとしなどを並べてある中の呼鈴をとんと強く、あと二ツを軽く、三ツ押すと、チン、リンリンリン——と鳴る、ばたばたと急いで来て、

「はい、」といって顔を出した以前の小間使、先刻意を了したと見えて二本ばかり団扇をそれへ差出す折から、縁側あしおとに登あしおと音おとして、奥の方から近ちかづいたが、やがてこの座敷の前の縁、庭樹こを籠こめて何となく、隣家となりのでもあるか蚊遣の煙うつつの薄りと夏の夕を染めたる中へ、紗しやで

あろう、被布を召した白髪を切下げの媼、見るから気高い御老体。

それともつかぬ状で座敷を見入ったが、

「御客様かい、貴方御免なさいよ。」といつて座に着いた。

「灯をね、」と顔をさし寄せて、令夫人は低声でいう。

夕暮の徒然、老母も期せずしてこの処に会したので、あえて音楽に関して弟子に対する他は、面会日が水曜と触の出た令夫人が、次の室に居合せたり、奥深く世を避けておわす老母が縁側に来合せたりするのが、謝礼金五千足を持参の者に対する鴨川家の家風ではない。青年は蓋し期せずして拝顔を得たのであった。

「お初に。どちらの、」とこれも鴨川をちよいと御覧する。

「勝山さんのお使ですつて、」と令夫人傍から引取つて引合せる。

「おお、あの何か江戸ツ子の、いつも前垂掛けでおいでなさる、活潑な、ふアふアふア、」と笑つて、鯉が麩を呑んだような口附をする。

ト一人でさえ太刀打のむずかしい段違の対手が、ここに鼎と座を組んで、三面六臂となつたので、青年は身の置場に窮した形で、汗を拭き、押拭い、

「へい飛んだ御厄介様で、からもうお転婆でございまして、」

「可いさ。だがの、内なぞは傍のおつきあいがおつきあいじやで、そこはまたな、御婦人じやから直接にいつては赤い顔でもなさると悪いで申さんじやったが、前掛は止して袴になさるなぞは、まず第一のお心懸じやよ。いや、しかし貴方の前じやけれどお夏さんは珍しい御容色よし、ほんのこと内なぞはおつきあいがおつきあいじやから、御華族様から大商人方の弟子も沢山見えるけれど、品といい様子といいあのお娘が一番じや。よくしたもので、上つ方はまあ少々はおでこでもそこは事が済みますが、下々の娘が出世をしようというには、さらりと打明けた処で容色じや。面じやの、ふアふアふア、お夏さんなぞは心懸次第またどんな出世でも出来るのじや、こつちへ出入つてござればおつきあいがおつきあいじやから、ふアふアふア。」と鯉吞麩の口、蕪村がいわゆる巨口玉を吐く鱸と相似て非なるものなり。

十一

青年はこれに答うる術も知らぬ状に、ただじろじろと後室の顔を瞻つたが、口よりはまず身を開いて逡巡して、

「ええ、からもう、」というばかり、逡巡しりごみの上に、なおもじもじ。

「一体何じや、内へござる他ほかの方とはちと氣風が違つていなさるから、その辺が何となく御身分のある方とはお交際つきあいがなさりにくいのじや、それも心こころ懸がけ一ツで、の、ああどうともなります。」と念を入れて喋舌しゃべれば顔も動かし、白い切髪も動いたのである。

「さようでございましょうか、へい、」といつてこの泥に酔つたような、哀あわれな、腑効ふがない青年わかものは、また額を拭つた。汗は流るるばかり、ほとんど取乱した形に見えたので、夫おくが人才た子は、さすがに笑止とや思おぼしけん、

「貴方まあお羽織をお脱ぎなさいましょ。」と深切におつしやりながら、団扇うちわづか使の片手あわぎに、風を操るがごとくそよそよと右左。

勿体ない、この風にさえ腰も据すわらないほど場打ばうてのしている者の、かかる待遇に会して何と処すべすべき。

青年わかものはそわそわしたが、いつの間にか胸紐を外して、その五ツ紋を背後うしろにはらりと、肩すべをこらして脱いだのである。

「じゃあ御免を被つて遣やっつけますぜ。」と素頂すってんびん天にぞんざいな口を切つて、袂たもとの下を潜くぐらすと、脱いだ羽織を前へ廻して、臆おくめ面もなく、あなた方の鼎かなえに坐つた真中まんなかで、裏返

しにしてふわりと拵げた。言語道断、腕まくりで膝を立て、

「借もんだからね、皺しわにしちやあ動きが取れませんか、」と、切上った舐まなじりに筋を集めてニヤリと笑った。

余りの思懸けなさに、鴨川の一家いっけ、座にある三人、呆氣に取られる隙ひまもなく、とばかりに目を見合せた。中にも才子はその衝に当たったから、風が止やんだようにじつとする。

青年わかものは身を斜めに、肩を揺ゆすつて才子に突懸け、

「煽あおぎねえ、へ、奇代な風だ、心持の可い日和だい。遠慮をすることあねえぜ。こう聞きねえ、実はその団扇使を待つてたんだ。様さまあ見やがれ、」というと、嶮のある目を屹きつと見据え、今なお座中に横よこたわつて、墨色も鮮あざやかに、五千疋とある奉書包に集めた瞳を、人指指の尖さきで三方へ突つき廻し、

「誰を煽あおいだつもりだよ、五千疋のお使者が御紋服の旦那だと思つと、憚はばかんながら違ちがいます。目先の見えねえ奴等じやあねえか、何だと思つてやあがるんだ。手前てまえことはね、おい、御当所日本橋は人形町通よ、赤煉瓦の学校裏、紋床やつかいに役介したぞりになつて下したぞり剃の愛吉あいきちてえ、しがねえものよ。串しやうだん戯ぎじやあねえ、紙包うわがきの上書うわがきばかり下目遣いで見てないで、ちツたあ御ご人体じんたいを見て物を謂いいねえ。」

「これ！」と向直つて膝に手を置いた、後室は育柄、長刀の一手も心得ているかして気が強い。

「何を。」

「何じやな、汝は一体、」と大人は正面に腕を組む。令夫人はものもいわず衝と後向きになりたまう。後室は声鋭く、

「無法者め！」

「いよ。お婆々、聞えます聞えます、」

羽織を脱いで本性をあらわした、紋床の愛吉は薄笑をして、

「歌の先生、どうだ歌先、ちよつと奥さん、はははは、今日ア。」と、けろりと天井を仰いだが、陶然として酔える顔色、フンといつて中音になり、

「——九は病五七の雨に四ツひでりサ——」

十二

襖も畳も天井も黄昏の色が籠つたのに、座はただ白け返つた処へ、一道の火光颯と葭戸

を透いて、やがて台附の洋燈ランプをそれへ、小間使の光は、団扇うちしろを手にしたまま背うしろむき向むきになつてゐる才子かたわらの傍そばへ、そつと差置いて退さがろうとする。

「待ちねえ。」

というが疾はやいか、愛吉は手を伸のべてむずとその袂たもとを捉とらえた。

「あれ、」

「遁にげらない、どうだ、謂いうことを肯きかねえか、応うむといやあ夫婦めおとになるぜ。」

「御串戯ごしやうだんを遊あそばし、」と女中は何事も知らないのであるから、つい通りの客とばかり、酒も飲まないのにと、驚いて変に思う。

「何、串戯くわだなものか真剣だ、ずつと寄よかねえ、内証ないしよ話は近い方が可いい、」と、ぐいと引くと、身体からだが斜ななめに靡なびく処ところを、足を挙げて小間使の膝の上に乗せた、傍若無人の振舞。

「何をするか、」

「光！」と堪たまりかねて大人と後室いっ、一は無む法者はうしやを、一は小間使を、ほとんど同時に同音に叱咤しつたした。

小間使こそ、膝は犯される、主人には叱られる、ばたばたと身を悶もだえ、命の瀬戸際と振放はなしてフイと遁にげた。

愛吉は腕を反し、脚を投出したまま哄然として、

「ははははおもしろい、汝！ 嫌われて何がおもしろい。畜生、」と自ら嘲って、嚏を仕損つたように眉を顰め、口をゆがめて頬脣をびつしやり平手でくわらし、

「様あねえ、こんなお大名の内にも感心に話せそうなのが居ると思ったがやつぱりいけねえ、ぐうたらのおたんちんだ。我が顔つきが気に喰わねえそうだ、分らねえ阿魔じゃあねえか。やい、」と才子が踵をかさねた腰に近き、その脚で畳を蹴たが、頤を突出した反身の顔を、鴨川と後室の方へ捻向けて、

「汝等一体節穴を盗んで来て鼻の両方へ御丁寧に並べてやあがるな。きよろきよろするな、い、こう睨むない、蛙になるぜえ、黙って目を瞑って、耳の穴を開けて聞け。私等が畠のよ、勝山さんのお夏さんを何だと思ってるんだ、何と見損いやあがりたい、いけ巫山戯た真似をしやあがつて、何だ小股がしまつてりや附合がむずかしい？ べらぼうめ、憚んながら大橋からこつちの床屋はな、山の手の新店だつても田舎の渡職人と附合はしねえんだ、おともだち、お気の毒だが附合はこつちでお断だ。

それもよ、行儀なら行儀をしつけようてえ真実からした事なら、どうせお前達はお夏さんにやあお師匠様だ、先生だ、私が紋床の拭掃除をするのと異りはねえ、体操でも何

でもすら。そうじゃあねえか、これがな、お前か、婆か、またこの御新造様なら仔細はねえ、よしんば仔細があつた処で泣く子と地頭だ、かれこれいつて来る筋じゃあねえ。へん、何曜日とやらの午後でなくつちやあ面あ出さねえとおっしゃる方が、少しばかり実のある紙包が出ると、たちまちおひきつけへ出てござつて、どうだい、下刺のこの愛的を団扇で煽ぐだろうじゃねえか。第一、婆の空お世辞が気に入くわねえや、何ていう口つきだ、もう一度あの、ふアふアを遣らねえか。いや、譬えようのない異変な声だぜ、その饒舌る時の歯ぐきの工合な、先生様の嫌な目つきよ、奥方のこの足のうらまでちやんと探鑿が届いて、五千疋で退治に来たんだ、さあ、尋常に覚悟をしやがれ、此奴等！」

愛吉は瘦せたのを高胡坐に組んで開き直る。

十三

「震えない震えない、何もそう、鮭の天窗を刻むようにぶりぶりするこたあねえ、なぐり込に來たのなら、襷がけで顛巻よ、剃刀でも用意をしていらあ。生命に別条はねえんだから騒ぐにやあ当らねえ、おう、奥様ちよいと、おい、先刻のようにお暑うござ

いますとか何とか謂つて、その団扇で私をば煽いでくんねえ、煽ぎねえよ、さあ煽げ、煽げ、煽がねえかい。」と、愛吉は目の色の変るまで相手の三人を屹と睨めて、手も足も突張返つた。

「母様、」と才子は衝と身を起しざまに、愛吉を除けて起つた。

「貴郎もお立ちなさいまし、狂人ですわ。」と、さも侮り軽んじたごとき調子で落しめて言うのに和して、

「狂人だ。」

「うむ狂人じゃ、巡査に引渡すが可いじやろ。」

「さあ、引渡せ、そうでなきやあ団扇で煽げ、」と愛吉は仰向けに寝て大の字形、挺でも動きそうな様子はない。謂う処に依れば才子に思うさま煽がせさえすれば、畳に生した根も葉も無く、愛吉は退散しそうに見える。

按ずるに煽ぐという字は火偏に扇である、しかればますます奴のが盛になつても、消えて鎮まるべき道理はないが、そのかかることをいい、さることを為すは、深き仔細があったので。

愛吉は紋床で謂つた、鴨川はその敵で親の仇とも思う怨がある、それは渠がかねて愛顧

を蒙る勝山の女お夏というのに就いたことである。

今より五日ばかりの前、振袖立矢の字、児鬻、高島田、夜会結などいう此家に入山の弟子達とは太く趣の異なつた、銀杏返の飾らないのが、中形の浴衣に縺子の帯、二枚裏の雪駄穿、紫の風呂敷包、清書を入れたのを小さく結んで、これをまくり手にした透通るように色の白い二の腕にかけて、その手に日傘をさした下町の女風、服装より容色の目立つのが一人、馬車新道へ入つて来たことがあるう、それがお夏であつた。

お夏は人形町通の裏町から出て、その日、日本橋で鉄道馬車に乗つて上野で下りたが、山下、坂本通は人足繁く、日蔭はなし、停車場居廻の車夫の目も煩いので、根岸へ行くのに道を黒門に取つて、公園を横切つた。

あとさき路は歩いたり、中の馬車も人の出入、半月ばかりの早続きで熱けた砂を装つたような東京の市街の一面に、一条足跡を印して過つたから、砂は浴びる、埃はかかる、汗にはなる、分けて足のうらのざらざらするのが堪難い、生来の潔癖、茂の動く涼しい風にも眉を顰めて歩を移すと、博物館の此方、時事新報の看板のある樹立の下に、吹上げの井戸があつて、樋の口から溢れる水があたかも水晶を手繰るよう。

お夏は翳していた日傘の柄を横に倒して熟と見たが、右手に商品陳列所の外圍が白ず

んで、窓々の硝子がらすがぼやけて見えるばかりか、蟬の声さえ地の下に沈んで、人気はなく、近づいて来る登音あしおともしない。もつともここに来る道で谷中やなかから朝顔の鉢を配る荷車二三台に行逢つたばかりであるから、そのまま日傘を地の上へ投げるように置いて、お夏は吻ほっといきをついた。

十四

腕かいなにかけていた紫の風呂敷包は、輪を外して日傘の上。お夏は袂たもとから手巾ハンケチを出して、件くだんの水に浸しながら、手を拭ぬぐい、襟を拭い、胸を拭い、足を冷して埃を洗つて、颯さっとあとを絞出したが、懐にせんも袂にせんも、びつしより濡れているから、手巾ハンケチをそのまま日傘の柄に持ち添えて、気軽に雪踏せったちやらちやらと、鴨川が根岸の家へ急いだのであった。

鶯うぐいすだに谷を下りて御院殿を傍かたえに見て、かの横町へ入ると中ほどの鴨川の門の前に、二頭立の馬車が一台、幅一杯になつて着いていた。

月に三度あるいは二度、十四から通うて二十はたちの今まで、いわゆる玉の輿こしがこの門に在ることは、あえて珍しくはないのであったが、かくまで道を塞いで、縦ほしに横附けになつてい

たのは、はじめて。

もとより豆腐売、油屋など、荷のある類はあらかじめこの一条の横町は使わぬことになつて居るけれども、人一人、別けて肩幅の細りした女、車の齒を抜けても入られそうに見えるけれども、逞しい鼠色の馬の面が、小鼻を動かし、呼吸を吹いて正面に門の処に並んで居るので、お夏は日傘を楯にしてあなたこなた隙間を差覗くがごとくにしたが進みかねた。

(どなたか、ちよいと、私、用があるんですから。)

声を懸けると三人が三人、三体の羅漢のように、御者台の上と下に仏頂面を並べたのが、じろりと見て、中にも薄髻のある一体が、

(用があるなら勝手口へ廻れ、)とつつけんどんに陀羅尼音でいったのである。

対手は馬二匹と男が三人、はじめから気を吞まれてお夏は、

(はい、)といつて、小戻をして、黒塀の板戸の角、鴨川勝手口とある処へ引返したが、何となくその首を垂れた。

されば誰憚るといふではないが、戸を開けるのも極めて内端じゃあつたけれども、これがまた台所の板の間に足を踏伸ばし、口を開けて眈を垂れていた、八ツさがりの飯炊の耳

には恐しく響いたので、（騒々しいじやあないか、誰だよ。）と頓興とんきように、驚かされた腹立紛れ。勝手口から入るものには、この位なことをいつて差支えないのであろう。

（お休みの処を、済みません、）と丁寧に小腰ここしを屈めて挨拶あいさつをしたが、うっかり禁句とは心着かなかつた。飯炊は面つらを膨らして、

（へん、ちやぶ屋の姉さんじやあるまいし、夜更よふけにお客は取りませんからね、昼間寝たりなんかしませんよ、はい、憚はばかりさま様でございますよ、空あいたのはそこに出してあら、）といわずに伸のびをして、ふてくされてふいと立った。小間使はともあれ半季がわりの下働きは、上かみの弟子なる勝山さえを知らずして、その浴衣、その帯、その雪踏、殊ねぼけめに寝惚目ねぼけめなり、おひるに何か取つたらしい、近い辺あたりの鳥屋の女中と間違えたのである。お夏は思わず、芙ふ蓉ようの顔に紅を灌そそいだ。

飯炊が居なくなつては袴はかまを穿はいた例いづもの書生が取次しよせに出る場所ではない、勝手は分らず、啣くわえて振りつけられたような山出しのむく犬を、また呼び出そうという声は持たず、お夏は人いきれに悩んだごとくうっかりして彳たすんだ目の毗まなじりの切れたので左手ひだりてを見ると、見透みすかさる庭の模様、百合の花にも、松の木の振にも、何となく見覚えがある、確たしかに座敷から眺めの処、師の君は彼かしこ処こにこそ。

お夏は身を忍ぶがごとく思いなしつつ。

十五

鳳仙花の、草に雑ましつて 一一 並ふたならびばかり紅白の咲きこぼるる土塀際を斜はすに切つて、小さな築山の裾すそを繞めぐると池がある。この汀みぎわを蔽おほうて棚の上に蔓はびこり重る葡萄の葉蔭に、まだ薄々と開いたまま、花壇の鉢に朝顔の淡あざきが種いろ々々。

あたかもその大輪おおりんを被かついだよう、紹ろうの羅すもめに紅の襦じゆばん袷すかを透して、濃あじいお納戸地に銀泥をもつて水に撫なで子を描しこいた繻珍しゆちんの帯を、背せなに高々と、紫菱田鹿の子の帶上を派手に結んだ、高島田で品の可いい、縁側を横にして風采四辺あたりにを払うのが、飛石にかかると眩まばゆくお夏の瞳に映じた。

机を置いてこれに対し、浴衣に縮緬ちりめんの扱帯しごきを《し》めて、肱ひじをつき、仰のげざまの目を瞑ねむるがごとくなるは、謂うまでもなく鴨川であった。

二人の中に、やや座を開いて控えたのは、すなわちこれ才子の御方おんかた。

お夏は蝶々鬚の頃から来馴れているし、殊にその時三人が座を構えたる一室のごとき、

いつも入込に教を授かる、居心の知れた座敷ではあつたけれども、不断とは勝手が違つた庭口から案内なしの推参である上に、門でも裏でも取つてつけない挨拶をされた先刻の今なり、来客の目覚しき、それにもこれにも、氣臆れがして、思わず花壇の前に立留まると、頸から爪さきまで、木の葉も遮らず赫として日光が射した。

才子は正面に、鴨川は横目に、貴なる令嬢を振返つて、一斉に此方を見向いた時、お夏は会釈も仕後れて、畳んだ手巾を搔撮んで前髪の処に翳したのである。

応とでも言葉がかかれば、取継る法もあるけれども、相手方はそれなり口も利かなかつた咄嗟の間、お夏は船納涼の転寝にもついぞ覚えぬ、冷たさを身に感じて、人心地もなく小刻につかつかと踵を返した。

鳳仙花の咲いた処でぬつと出て来たのは玄関番、洗晒した筒袖の浴衣に、白地棒縞の袴を穿いた、見知越の書生で、

(やあ、貴女でありますか、勝手に居た女中が女の明巢覗が入つたつていうですからな。はははは、何を寝惚けおつて。さあ、お通りなさいまし、馬鹿な、)と氣抜けのした様子。(はい、御門の処に馬車が居て恐うございましたから間違えてこつちへ参りました、どうも失礼。)

(いや、飛んだ不都合でありました、ずっとおいでなさい。ちようど御来客で先生はそこのお座敷にいらつしやいます。)とこの者だけは調子が可い。

(はばかりさま憚様ですがちよいとそうおつしやつて下さいましな、またお客様で御邪魔だと悪うごごいます。)

(なめに何、やまこうち山河内様のお姫様で、同じお弟子なんでありますから構いません、いらつしやい。)といい棄てて、この暑いに袴を穿かせるほどな家風、一体婦人を対手の業体、歌所はしつけのいいもので、ニヤリともせず真面目くさり、髭のない男の手持なげに、見事なにきび面砲を爪探りながら、勝手の方に引込んでしまった。

お夏は帰るにも帰られず、折角の取次にも向うから遠慮されて、太く便を失ったが、暑さは暑し弱い身の、日向に立っていられる数ではないから、止むことを得ず、思い切つて気の進まないのを元の処へ引返すと、我にもあらずおずおずして、差俯向いて、姫と、師と、その夫人とおわす縁側へ行つて、両手をついたが、天窓から叱りつけでもされるように、お夏は消入る思がした。

お夏はようよう座に着いたが、鴨川が澄して見もせぬ目よりも、才子がつんとしている胸よりも、山河内の姫様というのが、膝に置いた手の宝玉入の指輪よりも、真先に気が着いたのは、大人が机の傍に差置かれたる、水引のかかった進物の包であった。

今こそ人形町の裏通に母親と自分と二人ぐらし、柳屋という小さな絵草紙屋をしているけれども、父が存生の頃は、隅田川を前に控え、洲崎の海を後に抱き、富士筑波を右左に眺め、池に土塀を繞らして、石垣高く積累ねた、五ツの屋の棟、三ツの蔵、いろは四十七の納屋を構え、番頭小僧、召使、三十有余人を一家に籠めて、信州、飛騨、越後路、甲州筋、諸国の深山幽谷の鬼を驚かし、魔を劫かして、谷川へ伐出す杉檜松柏を八方より積込ませ、漕入れさせ、納屋にも池にも貯うることに、乱杭逆茂木を打つたごとく、要害堅固に礎を立てた一城の主人といつても可い、深川木場の材木問屋、勝山重助の一粒種汗のある手は当てない秘蔵で、芽の出づる頃より、ふた葉の頃より、枝を撓めず、振は直さず、我儘をさして甘やかした、千代田の翼に生抜きの氣象もの。

随分派手を尽したのであるから、以前に較べてこの頃の不如意に、したくても出来ない師家への義理、紫の風呂敷包の中には、ただ清書と詠草の綴じたのが入っているばかりの

仕誼しぎ、わけを知つてただけに、ひがみもあれば気が怯ひけるのに、目の前に異彩を放つ山河内の姫が馬車に積んで来た一件物、お夏はまた一倍肩身が狭くなるのであつた。

されば気の挫くじけた声も弱く、

（お暑うございます、）と手をついて挨拶して、ものもいってくれぬ師匠夫婦が気色けしきのほどを伺うと、螢ほたるの祟たりがあるのでないから、因縁事でもあるまいけれども、才子はその時も手にしていた深草形の団扇を膝の真ま中なかあたりで、じつと凝視みつめて黙っていたが、顔を上げると、何と思つたか、半白という上目づかいに、お夏の面おもてをじろりと見て、

（ああ、暑うございますこと、勝山さんあなたお客様を煽あおいで下さい、私はちよいとあちらへ参りますから、）と畳へ団扇をすべにらして、お夏の身近う突いて寄越よこし、（失礼を、）と姫にいつて、そのままふいと座を立たつた。

お夏は聞き正ただすまでもなく、疑うまでもない、明かに、ちようど自分が居る背後うしろから煽あおぎ参らせよ、といわれたのである。

それ、頼まるれば越後から米搗こめつきにさえ出て来る位、分けて師の内室うちぢみが仰おほせであるのに、お夏は顔の色を変えてためらつた。

（そうだ、勝山さん煽いでお上げ、）とお夏が直ただちに命を奉たげぬのを、歌詠うたよみの大人は寛仁

大度、柔かに教えるがごとく仰せられる。

それでも黙つて俯向うつむいていた。

鴨川はまた優しい声して、

（分りませんか、あのね、今才がそういつたのはね、あちらに用があつて行くから、あなた、そこにありますその団扇で、お客様を煽いで下さいと言つたんです。）

（はい。）

（分りませんか、あのね、今才がそういつたのはね、あちらに用があつて行くから、あなた、そこにありますその団扇で、）

お夏は堪たまらず団扇を持つて、姫うすものが羅の袂たもとを煽いだのであつた。

十七

「先生、惜おしいことをしました、同一杯おんなじ回生きつ剤けを頂かして下さるのなら、先方むこうへ参りません前に、さきこうやつて、」

と麦酒ビールの硝子杯コップを一呼吸ひといきに引いて、威勢よく卓テ子エブルの上に置いた、愛吉は汚れた浴衣の

腕まくりで、遠山金之助と、広小路の麦酒ホール（ビイヤ）の一方を領している。

「五六杯引掛（ひっか）けておきや、半分は酒が手伝（てづ）つて暴（あ）れてくれます、何しろしらふなんで、」
といいかけて、迫（せま）つた眉根を寄せたのである。

金之助は腰をかけたまま、両手で椅子を圧（お）えて卓子に胸を附（く）着けて、

「大向（お）うが喝采（やんや）でない迄も謹（しん）んで演劇（しげい）をする分にやあ仕損（し）ないが少ないさ、酔（よ）つぱらつて出懸（で）けてみなさい、他（ほか）の酔（よ）つぱらいと酔（よ）つぱらいが違（ちが）うんだよ。愛吉（あいきち）さん、お前（まへ）が酒と連立（れんりつ）つたんじや、向（むか）上（か）から鴨川（鴨川）で対手（あいて）になつてくれやしない、序幕（ゆうすりば）に出した強談場（ゆすりば）だし、若（わか）干金（にかし）かこつちから持込（もちこ）めというのだから、役不足（やくふそく）だつたらう、まあ飲（い）むが可（い）い、」と笑つて
いる。

「どういたしましたして相済（あ）みません、私（わ）あね、先生（せんせい）、書生（しよせい）や車（くるま）夫（お）なんぞが居（ゐ）るてますから、
搦（つか）出（みだ）す位（くらい）なことはするだろうと思（おも）つてね、そうしたら一番撲（ぱ）倒（たお）しておいて、そいつを
機（しお）に消（け）えようと思（おも）つたんだが、まるで足腰（あしこ）が立たねえんです。まだね先生（せんせい）、そりや可（よ）うご
ざいますが、彼奴（あいつら）等（ら）人を狂（きや）人（が）にしやあがつてき、寄付（よ）きやしませんでした、男（お）ごかしだ
の、立（た）てごかしだのは幾（いく）らもあるんだけれど、狂人（きやうじん）ごかしは私（わ）あはじめでなんで、躍（よ）るよう
な手（て）つ（て）つきで引（ひ）上げて参（ま）りましたがね、ええ、お羽織（お）はお返（か）し申（ま）します。」

愛吉は胸紐を巻込んで、懐に小さく畳んで持って来た、来歴のあるかの五ツ紋を取出して、卓子の上なる蘇鉄そてつの鉢物の蔭に載せた、電燈の光はその葉を透すかして、涼しげに麦酒ビールの硝子杯コップに映るのである。

「ですが先生、下司げすは下司で、この羽織を着た窮屈くつきさツたらありませんでしたぜ、私わつしあ思おもいます、この上に袴はかまでも穿はいた日にや、たつて獄舎ごくやの苦くるみでさ。」

「それでもよくお前まへごまかしたな。」

「先方さきじやあ思おももつかなくかつたからでしょう、あのお夏なつさんに、こんな友達があると思つた日にや、狒ひひ々に人間にんげんの情婦いろが出来るとあきらめなけりやなりません、へい、希代きだいなもんです。」とまた煽あおる。

「沢山たんおあがり、どうだね。」

「済みません、どうも五千疋御散財ごさんざいをかけました上に御羽織ごひしを拝借はいせき、その上御馳走ごちそうでございます。ほんとうに先生は、金主きんしゆと作者さくしやと、衣裳いしやう方かたと、振ふつけど、御見物ごみぶつとかねて下さるんだ、本雨ほんあめの立廻たちまわりか、せめてのことに疵きずでもつけるんでなくつちやあ御鼻肩ごひしが効きがねえんですが、山やまが小せえんだね、愛宕あたごの石段いしだんを上あるほどもないんですからね。」

「だって、ちよいとでも煽あおがせて来たら可よいだらう、仕返ししがへしはそれだけで十分じふぶんさ、私も勝かち

山というその婦の様子を聞いてさぞ心外だつたらうと思つたから。一体風のよくない御公家おんかでな、しみつたれに取りたがる評判の対手あいてだから、ついお前の話に乗つてお茶番を仕組んで上げたようなものの、これが道理から言つて見なさい、師匠と親は無理な者と思えと、世間じゃあいうんだよ。弟子にお客を煽がした位、手近な物を取つてくれも同然さ。癩しやくに障つたの、口惜くやしいのと、怪しからん心得違いだと、かえつてお前さん達の方を言い落さなけりやならない訳だよ。」

「へい、大きおつにさようでございます。」と愛吉の神妙さ。

十八

「はははは、真面目まじめになるな、真面目になるな、ぐつとまた一杯景気ひとつをつけて、さあ、此こなた方方楽屋内なたかたうちとなつて考えると面白い、馬鹿に気に入つた、痛快といふことだ。」

金之助は色気のない嚙おくびをし、垢あかぬ抜けのした目のふちに色を染め、呼吸いきをフツと向うへ吹いて、両手で額を支えたが、

「可いい、可いい、ああ溜りゆういん飲いんの下る話だ、五千足の顔を見りや、知事公の令嬢で歌所の奥

方が、床屋の役介者——まあそうしておけよ——役介者を煽ごうという当世に、お世辞をいって紅白の縮緬でも拝領しようという気はなしに、師匠が華族様を煽がせたといつて、やけに腹を立てた柳屋のも難有い。人事とは思わないで、それをまた親の敵ほどに癩に障らしたお前も私あ嬉しい。理窟はなしにとぼけていて飛んだ可いが、いや、大人気もなくその尻馬に乗って、利のつく金を若干と痛んだ、この遠山先生も悪くはあるまい、」と金之助は独りで莞爾々々。

「話せらあ、話せらあ、こいつあ話せらあ。無暗に飲めます。」と愛吉はがぶりがぶり、狼と熊とが親類になつたような有様で。

「理窟はないとおつしやいますかね、先生、時と場合と代物に因るんですよ。何も口の端を抓られるばかりが口惜いというんじやありません、時に因りますとね、蚊が一足留まつたのが蝮に食われたより辛うございます。私あね、親孝行な奴が感心だというんじやあねえんで、へい、不孝な奴でも豪いといひます。へい、盗人だつて気に入るのがあるし、施をする奴に撲倒してやりたいのがありますね。不動様は鼻肩ですが、念仏は大嫌。水ごりを取つてそれが主人のためなんだと聞いたつて、びくともしやあしねえんで、お三どんが鞆を切らしたつてそれが不便というんじやありません、そんなのははじめツか

らその気でつき合っているんですからね、甘いことをいうと附上りまき、癖になりますからね、にえず 酢をぶツかけときやあ可いんです、べらぼうめ、へッ、」といって、顔を擧め、「無法なことをいうと吃逆しゃつくりを出させるぞ。へッ、不可え、へッ、いやどうしやがった、へッ、何のこツたい、へッ驚きましたな。先生、そ、それですがお夏さんの団扇じゃあ恐しく胆がきもえました、理窟はねえんです、いえ、理窟がねえんじやあございせんや、けれどもその理窟は分りません。へッ、おい後生だ、へッ、何のこツた。」

愛吉はぐツたりと首を低れて、ふらりとしていたが、

「お待ち下さい、待つておくんないまし。ええと、先生、こうです。何だつてその、あの毛唐人奴等けとうじんめ、勝山のお嬢さん、今じやあ柳屋の姉さんだ、それでも柳橋よしちよう葎町あたりで、今の田圃たんぼの源之助きのくにやだの、前の田之助ぜんに肖にているのさえ、何の不足があるか、お夏さんが通るのを見ると、大騒動おおさわぎをやりますぜ。柳屋のお夏さんとはいわなないで、お夏さんの柳屋、お夏さんの柳屋ツて、花がるたを買いに来まき。何だ畜生、上野の下あたりに潜つてやあがつて、歌読も凄まじい、糸瓜へちまとも思うんじやあねえ。茄子なすを食つてる蟋蟀きりぎりす野郎の癖に、百文なみに扱いやあがつて、お姫様を煽げ、べらぼうめ。あの、先生、ここなんですがね、理窟は私わつしあ分つてます、お夏さんは、うまれつき団扇ツてものは人を煽ぐ

ものだつてことはかいきし知つちやあいないんです。」

「うむ、まず。」

十九

愛吉は思わずまた吃逆しゃっくりをして、

「へッ、いや怨敵退散おんてき。真面目な所へ吃逆は情ないなさけ。そうじやあごぎいませんか、深川の家に居なすつた時なんざ、団扇を持つて、自分を煽いだ事だつて滅多には無かつたでしょう。私ありましたが見ましたがね、お夏さんが行水を使って、立膝でこう浴衣の袖で襟ふを拭いてると、女中がね、背後で団扇車うちわぐるまつてやつをくるくるとやつてました、洗髪あらいがみだし、色は白し、」

と酔眼を睜みはつて苦い顔で、

「庭の植木からは雫しずくが溢れます、袂たもとだの、裾すそだの、その風でそよそよして、ぞつとするよな美しさ、ほんとうに深川中の涼しいのを一人で引受けていなさるようで、見る者も悪汗ひっこが引込んだんです。」

幾ら相場が狂ったつて、日本橋から馬車に乗つて、上野を歩で、道端の井戸で身体を洗つて、蟋蟀の巢へ入つてき、山出しにけんつくを喰つて、不景気な。この温気に何と、薄いものにして襦袢と合して三枚も襲ねている、茄つた阿魔女を煽がせられようとは思やしません、私はじめ夢の様でき、胸氣じやアありませんか。」

「可いや、まあそんなに怒るな、傍に居る者が怯気々々する。」

「御免なさいまし。つい、」といつて愛吉は苦笑した。

金之助はやや更り、

「何しろ以前は大した栄耀をしたものらしい。」と自ら語り頷いて且つ愛吉の面を見た。

「じやお前は先からの知己か、紋床に居て近所だから絵草紙屋と懇意になつたというんじやあないのかね。」

関係のいかんを怪んでそれとはなく尋ねたのが、愛吉に直ぐ讀めて、

「おかしゆうございましょう、先生、檜舞台の立女形と私等みたような涼み芝居の三下が知己ツつても凄じいんですが、失礼御免で、まあ横ずわりにでもなつて、口を利くのは仔細がなくツちやありませんとも。」

「成程、ありそうな仔細だよ。まず飲んで、ふむ。」

「過年、水天宮様の縁日の晩でしたっけ、大通のごった返す処をちつとばかり横町へ遠のいて明治座へ行こうという麵麩屋の物置の前に、常店で今でも出ていませ、盲目の女の三味線を弾くのがあります。投銭にはちやちやらかちやんなんて古風な流行唄をやつてますが、可い声で、ぞつとするような明鳥をやりませんでね。私あ例のへべれけで、素見数の子か何か、鼻唄で、銭のねえふてくされ。おう、勤する身のままならぬテツテチンテツテチンリンリンⅡⅡいつぞや主の居続に寝衣のままに引寄せてⅡⅡを聞かしねえ、後生だ。こうお客にすりや御損が行く、情人にして不足のねえからつけつ曾我の十郎てえお兄いさんだ、頼むぜ、と取巻いた人立を割つて怒鳴り込んだんでき。ひよろひよろしながら先生、」といつて、愛吉は椅子に懸りながら身悶をして見せた、金之助はやけに頤を撫でて、

「悪くない、うむ、そうすると、」

「いつも交返すんだから盲目め、声を知つてまき、かねてお氣にやあ入らなかつたと見えて、

(ああ、弾くがね、お鳥目をおくれ。)

(何を！)

（私の新内はばら銭じやあ聞かせないんだよ。）ツて言いましたぜ、先生、御存じじやありませんか、年増で縁日を稼ぐ癖に、好い女でさ。」

二十

ここに愛吉が金之助に話したことは、ちようど二年前、一昨年おとしの晩春の事で。

愛吉は今に到つてもおとなしくない、その時分もおとなしくなかつたが、恐らくいつまでもおとなしくないのであろう。

いうがごとく、縁日稼かせぎの門附かどづけも利かない気で、へべれけの愛吉が意にさからい、働あたを払わなければ術わざは見せぬ、お銭あしがなくなつていて、それでたつて凄すこい処を聞きたいなら、前に立つて提灯ちようちんは持たずとも、月夜に背後うしろからついて来て、お花主とくいの門かどでやる処を、こぼれ聞ききに聞いたら可よいと、愛嬌あいきようの無いことを謂いつたそうな。

二振ふりの斧おのと、一挺ちようの剃刀かみそり、得物えきものこそ違え、氣象おなじは同一、黒旋風紋床くろせんぷうもんじょうの愛吉きち。酒さけは過あやしている、懐なつかにはふてている。殊ことに人立ひとたちの中のこと、凹へこまされた面つらは握拳にぎりこぶしへ凸なになつて頭あわれ、支たうる者を三方へ振飛ふりばして、正面まへから門附かどの胸むねを掴つかんだ。紋床もんじょうの若いのが酔よつ

たといえ、交番でも棄てて置くは、店の邪魔はせず、往来には突懸らず、ひよろついた揚句が大道へ筋違に寝て、捨鐘を打てば起きて行くまで、当障りはないからであつたに、その夜は何と間違つたか、門附の天窓は束髪のまま碎けて取れよう、啊呀と傍の者。

(あれ！)

(畜生さあ、鳴かねえ驚なら絞殺して附焼だ。)と愛吉はちらつく眼、二三度撲りはずして、独で蹠跟げぎまにまた揮上げた。

握拳をしっかりと掴んで、力任せに後へ引放した者がある。

(顔を見ろ、)

(や、)

(蒼くなれ蒼くなれ、奴、居酒屋のしたみを舐めやあがつて何だその赤い顔は贅沢だい、我が注連縄を張つた町内、汝のような子子は湧かない筈だ、どここの流尻から紛れ込みやあがつた。)と頭ごかし、前後に同一ような、拾三尺帯の若衆は大勢居たが、大將軍のような顔色で叱つたのは、鯨の伝六といつて、ぬらくらの親方株、月々の三十一日には昼間から寄席を仕切つて総温習を催す、素人義太夫の切前を語ろうという漢で

あつた。

過日いつぞやその温習さらいの時、諸事周旋しゆせん顔に伝六木戸へ大胡坐おおあぐらを搔込んでいて、通りかかった紋床を、おう、と呼留め、つい忙しくつて身が抜けねえ、切前にやあ高座へ上るのだから、ちよいと道具を持つて来て髻ひげだけあたつてくんなよ、と言種いんぐさが横柄よこがらな上、かねて売れた構がまがらの顔色を癩しかに障さやらしていた、稻荷いなりさんの紋三もんざ、人を馬鹿ばかにすんな、内に昼寝ひるねをしてる処へ、意休いやすが髻ひげを持込んだつて気に向かなけりやお断り申すんだぜ、憚はげんながらこの稻荷いなりはな、寄席よじへ出開帳でがはしねえんだ、あばよ、一昨日おととい来い、とフイと通過はぎたことがあるから、坊主ぼくしが憎にくけりや袈裟けさまでの筆法ひつぽうで、同一内おなじの愛吉あいきちにも含んだ意味いみがあるらしかつた。

(放せ、やい、愛の手あいのて首くびは細こいつてよ、女の子おんなこが加減かへんをして握にぎるぜえ、この鯰なますめ。)といきなり取られた手を振切ふりきつて、愛吉あいきちは下駄したを脱ぬいで飛とび菟うつた、勢いきおいに恐おそれて伝六でんろくはたじたじと退さがつたが、附ついていた若い衆しゆがむらむらと押取りおつと包かんで、胴上たねあげにして放り出した。愛吉あいきちは足も立たず、腰も立たず、のめつているのを、いや、踏ふむやら、蹴くるやら。これを笑わらいずてに尻しつをまくつた鯰なますの伝六でんろくを真先まっさきに、若わかい者ものの立去たつたあとで、口惜くやしい！とばかりぶるぶると顫ふるえて突立つつたが、愛吉あいきちは血ちだらけになつていたのである。

築地明石町あかしちように山の井光起みつおきといつて、府下第一流の国手がある、年紀としはまだわかいけれども、医科大学の業を卒おえると、直すぐ一年志願兵に出て軍隊附になった、その経験のある上に、第二病院の外科の医員で、且つ自宅でも診察に應じている。

口くちすくな寡くちすくなで、深切で、さらりと物に拘かかわらず、それで柔和で、品が打上り、と見ると貴公子の風采あり、疾病やまいに心細い患者はそれだけでも懐しいのに、謂なまりうがごとき人品。それに信州、能登、越後などから修業に出て来て、訛なまり沢山たくさんで、お舌をなどという風ではない。光起の亡き父も、義庵と称して聞えた典てん薬頭やくのかみ、今も残っている門内左手ゆんでの方の柳の下なる、この辺あたりに珍しい掘井戸の水は自然の神薬、大概の病はこれを汲めばと謂い伝えて、折々は竹筒、瓶、徳利を持参で集るほどで。

先代の信用に当若先生の評判、午後ひるからは病院に通勤する朝の内だけは、内科と外科としかるべき助手を兩名使つて、なお詰めかける患者を引受け切れず、外神田に地を選んで、住所の町名をそのまま、明石病院あかしというのを私立で当時建築中、ここで山の手の病家を喰い留めようといいきおこう勢。

山の井の家には薬局、受附など真ま白しろな筒袖つとむそでの上衣うわぎを絡まとつて、肅々と神の使であるがごとく立働くのが七人居て、車夫が一人、女中が三人。但しまだ独身であるから、女は居ても何となく書生が寄合つたという遣やり放っぱなしな処ところがあつて、悪く片附かない構かまの、秘かくさず明あらさまなのが一際奥床おくどしい。

記者遠山金之助は、愛吉からこの山の井の名を聞くと、一層、聞く話に身が入つた、蓋けだしかねて自分は医学士と別懇であつたせいである。

さるほどに愛吉は鯨なまずの伝六一輩なまに突転つりばされて、身体五六ヶ所に擦すり疵きず、打たれ疵きずなど、殊ことに斬られも破られもしないが、背中の疼痛いたみが容易やすでない。

もつとも怪我をした当夜は、足を引摺ひきずるようにして密そつと紋床へ這戻り、お懶惰なまけさんの親方が、内を明けて居ないのを勿怪もつげの幸さいわい、お婆おばさんは就寝およつとなり、姐あねさんは優しいから、いたわつてくれた焼しょう酎ちゆうを塗ぬつて、上あがり口くちの火鉢わきの傍つづへ突臥つづして寝たが、さあ、難儀なんぎ。

あくる日帰ひかへつて来た紋三郎には口惜くやしくつても喧嘩けんかのことは話されず、もとより条理すじの立つた事ではない、酒の上の悪いた戯ずらを懲ちがらした方は、男が可あいけれども、親方は身内のこと、邪よこしまが非ひでもきかない気なり、かねて快からぬ対手あいてが伝六と明してはただ済すままい。引ひ被つかつて達たて引ひきでも、もしした日には、荒いことに身顛みかぶいをする姐あねさんに申ま訳わけのない仕し誼ぎ

だと、向後きようご謹みます、相替らず酔ったための怪我にして、ひたすら恐入るばかり。

転んだ身体からだを引摺って歩行あるしても、これほど疵がつく砂利は界限かいわいにない筈はずと、紋三内もんさんない々は睨にらんだが、愛的可いほどにしておけ、お前まえには母親おふくろがあるぜ、と言つて深くは咎とがめず、大目に見てくれたのが附目な位。可哀そうに染むだらうねと、あねさんがまた塗つてくれる焼酎を、どうぞ口の方へとも何ともいわない弱りさ加減、黒旋風の愛吉いたきち疼むこと一方ならず。

素人療治では覚束おぼつかなくなると、あたかも可紋床よしは、かねて山の井に縁故があつた。

先せんの義庵先生は、市に大隠を極きめて浜町に住すまつたので、若い奴等やつらなどと言つて紋床へ割込んで、夕方から集る職人仕事師輩ていはいを凹こますのを面白がつて、至極の鉄拐てつか、殊の外稻荷いぬぎが鼻ひい根きであつたので、若先生の髪も紋床が承る。

二十二

(どうです豪傑、蝦蟇がまの膏あぶらじやあ不可いけませんか。)と薬局に痛めつけられて、いつも蝦蟇の膏と酒さえありや外科も内科も訳なしだ、お前さん方は弱い者いじ苛めめで儲もつけるんだ、など

と大言を発する愛吉、中指のさきで耳の上を搔きながら大^{おお} 恠^{おしよ}げになつてその日もまた。

明石町へ通うこと五日六日、もう佳^よかるうという日のことであつた。

打傾^{うなだ}いたり、首垂^{うなだ}れたり、溜^{ためいき}息^{いき}をしたり、咳^{しわが}いたり、堅^{かたずみ}炭^{すみ}を埋^いけた大火鉢^{くすお}に崩折^{くずお}れて凭^{もた}れたり、そうかと思うと欠^{あくび}伸^びをする、老若の患者、薬取がひしと詰懸^あけている玄関^{げんかん}を、へい、御免^{ごめん}ねえ、で愛吉はつかつかと。

かかる馴染^{なじみ}でお出入^{でしゅつにん}といつたような怪我^{けが}人^{ひと}であるから、番号も遠慮^{えんりょ}もない、愛吉は四^あ 辺^{へり}構^{かま}わず、

(おう、柴田^{しばた}さん、この、診察^{しんさつ}所^{じょ}、と黒塗^{くろぬり}の板^{いた}に胡粉^{ごこん}で書^かいてある、この札^はをどうかしておくんなさいな。横^{よこ}ツちよに曲^まつて懸^かつてるんですが、私^{わが}あ過^{いつか}日^ひ中^{ちゆう}から氣^きになつてならないで、直すか直すかと思^{おも}つてるとやつぱり横^{よこ}ツちよだ。私^{わが}の内^{うち}は貧乏^{ひんぱふ}だけれど姉^{あね}さんが居^いるから暖簾^{のれん}が汚^{よご}れませんや、御新造^{ごしんぞう}が居^いなさならねえとそれだもの困^{まづ}つちまう、)と高慢^{こうまん}なことをいいながら、背^せ伸^のをして、西洋造^{せいやうぞう}の扉^{かど}の上に、鶏卵^{たまごいろ}色の壁^{かべ}にかかつた塗板^{ぬりばん}を真^ま直^{ただ}に懸^か直^{ただ}し、そのまま閉^とつてる扉^{かど}を開^{ひら}けて、小腰^{ここし}を屈^かめて診察^{しんさつ}所^{じょ}へ入^いつた。

密閉^{みつぺい}した暗室^{あんしつ}の前に椅子^{いす}が五脚^{ごきゃく}ばかり並^{なら}んで、それへ掛^かけたのが一人、男^{おとこ}が一人、向^{むか}うの寝台^{ねだい}の上に胸^{むね}を開^{ひら}けて仰^{あお}向^{むか}けになつて居^いる。若^わ先生^{せんせい}光起^{みつたけ}は、結城^{ゆうき}の袷^{あわせ}に博多^{はかた}の帯^{おビ}、黒八^{くろはち}

丈の襟を襲ねて少し袴短ゆきみじかに着た、上には糸織藍微塵あいまじんの羽織平打ひらうちの胸紐むなひも、上靴は引掛け、これに靴足袋はを穿はいているのは、蓋し宅診が済むと直ちに洋服に変わって、手車で病院へ駆けつけようという早手廻はとり。

卓子テエブルを傍に椅子に倚かかつて、一個の貴夫人と対向さしむかいで居た。卓子に相對して、藥局の硝子窓がらすまどを背後うしろに、かの白の洋服うわぎを着たのと、いま一人洋服を着けた少年と、処方帳をずばと左右に繰広げ、筆に墨汁ペンインキを含ませつつ控えたり。

藥の薫かおりは床に染み、窓を圧して、謂うべからざる冷静の趣。神社仏閣の堂と名医の室は、いかなる者にも神聖に感じられて、さすがの愛吉、ここへ入ると天窗あたまが上らず、青菜に塩。愛吉、藥の匂においに悄しおれ返つて医学士に目礼したが、一体八字髻ひげのある近眼鏡を懸けた外科の助手に毎日世話になるのであつたから、愛吉は猶予ためらわず、ひよこひよここと進むと、戸が半は開ひらききになつていたので、突いきなり然なり外科室へ首を突込つっここんだが、驚おどいて退すつた。

咄嗟とつさの間、世にも媚なまめかしい雪のような女の顔を見たのであつた、そうして愛吉がお夏を見たのは、それが最初はじめてだといふのである。

見るから心も冷ゆるばかり、冷たそうな、艶つやのある護謨布ゴムぬのを蔽おほいかけた、小高い、およそ人の脊丈ばかりな手術台の上に、腰まに絡まとつた紅くれないの溢こぼるるばかり両の膚を脱いだ後姿は、

レエスの窓掛を透す日光に、くつきりと、しかも霞の中に描かれたもののように留まつた。

愛吉の間の悪さ、思わず顔を赧らめながら、もじもじ後退になり、腰をかけて待合している、患者か、はた供のものか、円鬚の婦人の次なる椅子に堅くなつたが、心こそ着かざりけれ、外科室に寄つた椅子の上に、これもまた媚かしく差置いてあるのは、羽織と、帯と、解棄てた下メ《したじめ》と懐紙。取乱した藤お納戸、緋、桃色、水色、白、紅。

二十三

愛吉はきよとんとして、ぼんやりあらぬ方を眺めながら、目玉をくるくると遣つていと、やがて外科室のその半開の扉をおした、洋服の手が引込む、と入違いに、長襦袢の胸がちらちら、薄紫の半襟、胸白く、袷の衣紋の乱れたまま、前褌を取つたがしどけなく裾を引いて、白足袋の爪先、はらりと溢るる留南木の薫。

診察室を出て来たが、深川の勝山、まだ世盛の頃で、お夏その時は高島田の、年紀十

七であつた。

(何某。) とかの筆を持つた一人が声を懸けると寝台の上に仰向けになつていたのは、
 迂り落ちるように下りて蹠蹠と外科室へ入交る。

同時に医学士に診察を受けていた貴夫人は胸を搔合せたが、金縁の眼鏡をかけた顔で、
 背後へ芍薬が咲いたような微妙い氣勢に振返つた。

その時、打合せの帯を両手に取つて、床に膝をつきついてお夏の前に廻つたのは、先刻
 から控えていたかの円鬚の婦人であつた。

お夏は衿を取つて揃えると、腰から乳の下に下襦を無造作にぐるぐる巻、あてがつてく
 れる帯をして、袖を上へ投げて肩にかけた。附添の婦人は衝と立つて背後へ廻る。

愛吉は心なく垣間見た人に顔を見らるるよう、思いなしか、附添の婦人の胸にも物あり
 げに取られるので、うつむいては天窓を搔いた。

その帯をまだ結び果てなかつたほどのことで、光起は今貴夫人を診察し了して、立身
 なり、片手を卓子につきながら、低声で何か命じて、学生にその筆を運ばしめていたが、
 ちよつと筆を留めて伺つた顔に頷いて見せて、光起は衝と立直つた時、ふと、帯をしてい
 るお夏を見て、

(済みましたか。)

(ええ、)と頷く。

(痛かったでしょう。)

(はあ、)と事もなげに、淡泊に答えたのである。

光起は微笑^{ほほえ}んで、

(貴女^{あなた}、母様^{おつかさん}のいうことを肯^きかないとまたできませんよ。)

お夏は襟^{くわ}を御^{くわ}えるようにして、差^さ俯^{しうつむ}向^むいて、颯^{さつ}と顔^{かほ}を赧^{あか}らめたが、何^{なに}にもいわないで莞^{にっこり}爾^りした。

愛吉は額^{なで}を撫^なでた。

医学士^{いぎがし}の言葉^{ことば}とお夏^{なつ}の素振^{そぶり}を、附添^{そそ}は嬉^{うれ}しそうに、

(お夏様^{なつさま}、あれ御^ご挨拶^{あいさつ}をなさいましな。)

(知らない、)と素気^{そっけ}ないことをいつて再び莞^{にっこり}爾^り。

(先生^{せんせい}、癩^{たむし}の治^なります薬^{くすり}はありませんでしょうか。)と不意^{ふい}に言い出したのは件^{くだん}の貴夫人^{きふじん}であつた。

(打^う棄^{ちや}つておおきなさい、)と光起^{みつし}は言^{こと}下に応^{こた}ずる。

(でもあのこんなですから、)ときも世馴れた、人懐こいといったような調子で、光起に背を捻向けると、頸を伸して黒縮緬の羽織の裏、紅なるを片落しに背筋の斜に見ゆるまで、抜衣紋に迄らかした、肌の色の蒼白いのが、殊に干からびて、眉を造つた、白粉の濃い、金縁の眼鏡に瞼の皺をかくした顔こそ若けれ、あらわに見ゆる筋骨は数四十であるのに、彼を抱くものあらば正にその者の手の下なるべき、左の背を肩へかけて、亜弗利加の地図のごとき一面の癩、あな笑止や。

「汚えな! 　つて私あ本當にうっかり。それが何です、山河内という華族の奥方だったんですつて、華族だつて汚えんですもの。」と愛吉はビイヤホールで語りながら、今も思出すほどか眉を擡めたのである。

二十四

名は知らず、西洋種の見事な草花を真白な大鉢に植えて飾つた蔭から遠くその半ばが見える、円形の卓子を囲んで、同一黒扮装で洋刀の輝く年少な士官の一群が飲んでいた。

此方に、千筋の単衣ひとえもの、小倉の帯、紺足袋を穿いた禿頭はげあたまの異様な小男がただ一人、大硝子杯おおコップ五ツ六ツ前に並べて落着払った姿。

時々髻ひげのない顔が集り合つては、哄どっという笑語の声がかの士官の群から起るごとに、件の小男はちよいちよい額を上げて其方そなたを見返るのであるが、ちようど背せなか合せになつてから、金之助にこれは見えなかつた。

ビヤホールの客は、今わずかに三組の外には無かつたので、生麦酒なまビールの出入だしいれをする一段高い台の上には、器械を胸の辺あたりにして受持のボオイがあたかも議長席に着いたもののように正面を切つて身動みうごぎもせず悠然と控えている、その下に椅子に凭かかつて一人のボオイは新聞を読む、これと並んで肩から脇の下へ金袋かねぶくろをぶらさげた一人、白の洋服の足を膝の処で組違えて、斜ななめに肱ひじで身体からだの中心を支えて立身で居る、しばしば蹺音あしおとを立ててしつこい叩たたきの土間を、靴で士官の群の処へ通うのはこのボオイで、天井は高く四辺あたりはひっそり、電燈ばかり煌々こうこうと真昼間まっぴるまのごとく卓子を照てらして、椅子には人影もなかつたのである。

戸外おもては立迷う人の足、往来も何となく騒ゆきがしく、そよとの風も渡らぬのに、街頭に満ちた露店ほしみせの灯は、おりおり下さまに靡なびいて、すわや消えんとしては燃え出づる、その都度よあきゆうど夜商人は愁うれわしげなる眉を仰向あおむけに打見遣うちみやる、大空は雲低く、あたかも漆で固めたよう。

蒼と赤と二色の鉄道馬車の灯は、流るる螢かとはかり、暗夜を貫いて東西より、衝と寄つては颯と分れ、且つ消え、且つ顛れ、輾轉として近き来り、殷々として遠ざかる、響の中に車夫の懸声、蒸気の笛、ほとんど名状すべからざる、都門一場の光景は一重の硝子に隔てられてビイヤホールの内は物色沈々、さすがに何となく穩かならぬ宇宙の氣勢の、屋を圧して刻々に迫るを覚ゆる、これが、風になるか、雨になるか、日和癖で星になるか、いずれとも極つたら、瀬を造つて客は一斉に籠むのであろう。

とばかりにしてもものの静けさよ。ここかしこの鉢植なる熱帯地方の植物は、奇花を着け、異香を放ち、且つ緑翠を滴らせて、個々電燈の光を受け、一目眇として、人少なに、三組の客も、三人のボオイも、正にこれ沙漠の中なる月の樹蔭に憩える風情。

この間に、愛吉がお夏の来歴を説く一場の物語は、人交もせず進んで、築地明石町の医学士の診察所における出来事にまで至つたのである。

「声を出して言つたのか、汚えなんて、癬を嘗めさせられはしまいし、肌を脱いで医者に見せた処を背後から、汚え、なんていう奴がありますかい、しかも華族だつてな、山河内……伯爵だ。

もつともその奥様は赤十字だの、教育会、慈善事業、音楽会などいうものに取合つて、

運動をするのに辻車で押廻すという名代なだいのかわりものなただけけれども、怒なだつたろう、皆驚みんないたろう、乱暴狼藉ろうぜきだ、どうした、それから、

「私わつしもついうつかり遣わつちやつたんで、はつと思うと、」

「うむ、」

「ちようど代診さんの方へ呼ばれたから遁にげ込みました。」

二十五

「しかし癬たむしきが汚きたえといったのが、柳屋の氣に入いつたというでもなからう。」

愛は真面目に、

「へい、そういう訳でもないんですがね。」

「それじゃあ手術台に肌脱はだだの、俗ぞくにそれあられもないという処ところを見られたのが御縁ご縁になつたか、但たしちつとどうもおかしいな。」

「何、そういうわけでもないんですがね。」

「何しろ、汝おまえの方からゆすり込んだものと私は思うな。」

「先生御串戯ごしやうだんを、勿論あれです、お夏さんは華族てえと大嫌だいきらひです。私が心わっしも同一おんなじだ、癖は汚えに違います、ですが、それがどうということはありませんよ。それからね、素肌を気にして腋わきの下をすぼめるような筋のゆるんでる娘ねえさんじゃありませんや。けれども私が出入ではいりをするようになったのは、こちらから泣附なみいたんです、へい。」

「手を合せて、拝みます、と口説くどいたか。」

「どういたし、……手前御慮外てまへごりょがいは申しません、泣ついたのは母親おふくろでさ。」

「ははあ、紋三郎がいったように、いつも酒ひだりの方の意見の義ぎだろう。」

「いいえ、その時は生命いのちにかかわります一件。」

「おや、お前それでも酒ほかの他にかかわることがあるだろうか。」

「大有り、」といって愛吉は硝子杯コップの縁わきを圧おさえながら、金之助をじつと見て、

「串戯しやうだんじゃありませんでしたよ、まったく。」

それがね、やつぱりその日なんです、事というと妙なもので、何でもない時は東京中押廻いっせきしたつて、蜻蜓とんぼ一足ぶつかりこはねえんですが、幕まくらがあくと一いっせき斉ときでさ。」

「大層感じたな。」

「まったくですから。」

「じゃあ何か、華族様へ御無礼を申したとあって、お差紙でも着いたのかい。」

「いえ、先刻も申しました通り、外科室の方へ呼ばれたんで、まずお座は濁りましたね。

それからお手当が済みました、もう通つて来ないでも大丈夫だ、あとはただ大人しくなさいよ、さ、大人しくしろが可うございましょう。

無暗とお礼を謂つて匆々に山の井さんの前を抜けて、玄関へ参りますとね、入る時にやあ気がつきませんでした、ここにそのまた珍事出、来の卵が居たんです。女の子で

「いづれそうだろう。」と金之助は故とらしく深く頷く。

「まあ、お聞きなさいまし。上口の突尖の処、隅の方に、ばさばさした銀杏返、

前髪が膝に押つくように俯向いて、畳に手をついてこう、横ずわりになって、折曲げている小さな足の踵から甲へかけて、ぎりぎり縹帯をしていました、綿銘仙の垢じみた袷に、緋勝な唐縮緬と黒の打合せの帯、こいつを後生大事にメ《し》めて、」

「大分悉しいじやないか。」

「私だつて先生、唐縮緬と縹子ぐらゐは知つてますぜ。」

「幾干か出せ、こりや恐ろしい。」

「真平御免なさい、先方は小児なんです。ごく内気そうな、半襟の新しいが目立つほど、しみつたれた哀な服装、高慢に櫛をさしているのがみじめでね、どう見ても女中なんです。恐ろしく疼むかして、小さく堅くなつて、しくしく泣いてるんです。」

姉さんどうしたんだツてね、余り可哀相だから声を懸けてやりましたが、返事をしません。疵処にばかり気を取られて、もう現なんだろうと思いましたが、少いの疼々しい。」

二十六

「じれつたいから突然肩に手を懸けると、その女中は苦しくツてか、袷も透すような汗びっしより、ぶるぶる震えているんでしょう。」

どうしたんだツて聞きますとね、足の裏から突通るほどの踏抜をしたんだそうで、その前の日の事だツていうんです。

見りや込合ツていましたけれど、どれも病人、人の世話を焼こうという元気の好い奴は居りませんや、こいつかかり合だ、身体を抜くわけにやいかねえような氣になりました。

一体どこの者だ、家は遠いかつて聞きますとね、つい五町ばかり先でございます、あの、親分の処に、と弱った声でいいました。親方というのは鯨の伝——どうです騒の卵じゃありませんか、尋常事じやアありますまい。

何でも伝が内の奉公人に違えねえ。野郎め、親方々と間違でも人に謂われる奴が、汝が使つてる者がこんな怪我をしてるのに、医者に寄越すつて、ないら病の猫を開放したような工合は何たる処置だい、姉さんをつけて寄越さないまでも、腕車というものがないのじやあなかるう、可哀相に丸ぼちやの色の白いのが、今の間にげつそり瘦せて、目のふちを真蒼にしていらあ、震えてるぜ。

そう思つて堪らなかつたんですが、気が着きますとね、待てよ、私が思った通を口へ出して謂やあ、突然伝を向うへまわして、ずらりと並べる台辞になる、さあ、おもしろい、素敵妙だ。

一番、この女をかつぎ込んで、奴が平生侠客ぶるのを附目にして、ぎゅうと謂わそう。蝦蟇の膏で凹まされるのも何のためだ、忘れやしねえ。」

と話をするにも凄まじい意気込んだ、愛吉はちよいと気をかえ、

「へへへへ、先の縁日の晩のは、全くこつちが悪かつたんでさ。落度はあつたつて口惜い

にや口惜いでしよう、先生、子^{しのたまわく}曰^いはよして聞いて下さい、可^ようございますか。」

「可^いいさ、可^いいさ。」

「オイ、姉^{わっし}や、私が肩^{かた}へつかまりねえ、わけなしだ。お前^{まへ}ン処^{とこ}まで送^おつてやろうと、穿^{はきも}物を突^{つつか}懸^かけておいて、蹲^{しゃが}んで背^せ中^{ちゆう}を向^むけますとね、そんな中^{ちゆう}でも極^{きまり}のわるそうに淋^{しみ}しい顔^{かほ}をして、うじうじ。

じれつてえ女^こじゃあねえか、尻^{しつ}なんざあ抱^{かか}きやしねえや、帯^{おビ}を持って脊^せ負^{おん}つてやら、さあ来^こい、と喧^{けん}嘩^かづらの深^{ふか}切^きづくめ、言^いぐさが荒^あつぼうございますから、おどおどして、何^{なに}と肩^{かた}へ喰^くいつくように顔^{かほ}をかくして、白^{まっ}昼^{びるま}、それでもこの野^の郎^{らう}の背^せ中^{ちゆう}へ負^{おん}がしましたぜ。あとで考^{かん}えると氣^きの毒^{どく}でさ、女^めの氣^きじやあ疵^{きず}が痛^{いた}む方^{かた}がどんなにお恰^{かつ}好^{こう}だか知^しれませんよ。

全く叱^{しか}りつけるように勸^{すす}めたんですからね、すすめ人^てが私^{わたし}でしょう。阿^あ魔^まはてつきり、ぶんなぐられると思^{おも}つて負^おぶつたもんです、名^なはお米^{こめ}ツていいいます、可^こ愛^{あい}い女^こなんですがね、十七^{じゅうしち}でしたよ。

さあ、歩^あ行^るき出^ですと、こ^こう耳^{みみ}朶^{たぶ}の処^{とこ}へ纏^{もつ}れた髪^{かみ}の毛^けが障^{さや}るでしよう、あいつあ一^{いっ}筋^{しん}でもうるそうがさ、首^{くび}を振^ふるとな^なお乱^{らん}れて絡^まちいますから、呼^い吸^きをか^かけてふ^ふツふ^ふツ鬢^{びん}の尖^{せん}を向^む

うへ吹いちやあ、三角みつかどの処まで参りますとね、背後うしろから腕車くるまが来ました。

町幅が狭いんですから、すれ違つて前へ駆け抜けたと思うと、振返つた若衆わかいしと一所に、腕車の上から見なすつたのは先刻さつきのお嬢様、ええ、お夏さん。」

二十七

「藤お納戸の、あの脱いであつた羽織を被きておいでなすつた。襦袢じゆばんの袖口に搦からんだ白い手で、母衣ほろの軸に搦つかまつて、背中を浮かすようにして乗つてましたつけ、振向いて私わつしがお米を負おぶつてた形を見て莞爾にっこり笑いなすつた。

顔を見合せますとね、こつちでも何だか知ちかづき己おれのような気がしたもんですから、遠慮しねえで、

(今日は、)と肚はらの中で言つてお辞儀したんです。

腕車は何、休んだんじやあございません、駆けてる中うち、ちよいとの間まなんで、そのまま飛ぶように行つちまいましたが、縁ひつでございましょう、先生。

世の中というものは、どこにどんな引ひかかりがあるか知れませんぜ。なぜつてますと、

あとで分りましたが、そのお夏さんの勝山という家は、私の亡くなりました父爺が、船頭で、奉公人同様に久しい間御恩になったのでございました。

さあ、それから米坊をかつぎ込んで、ちようど縁端に大胡坐をかいて毛抜をいじくつてやあがった、鯰の伝をふんづかまえて、思う状毒づいたとお思いなさいよ。

くだらないことをお耳に入れるでもありませんから、始末は申上げませんが、何しろ狭客だとか何とかいわれる分では、お米に届かねえ点が十分にあつたんですから、こりや力づく、腕づくじやあ不可ませんや、伝の親仁大凹み。

こつちあぐつと溜飲が下つて、おさらばを極めてフイとなつて、ぎつぷり朝湯を浴びた気さ、我ながら男振を上げて、や、どんなもんだい。

人形町居廻から築地辺、居酒屋、煮染屋の出入、往復、風を払つて伸しましたわ、すると大変。

暗がりを啣え楊枝、月夜には懐手で、香気に歩行していると、思いがけねえ狂犬めが噛みつくような塩梅に、突然、突当る奴がある、引摺倒す奴がある、拳固でくらす奴がある、一度々々呼吸を引かないばかりで、はッはッと思うことが、毎晩じゃありませんか。

「成程、」

「その度たんびに微傷かすりきずです、一年三百六十五日、この工合じやあ三百六十五日目に、三百六十五日だけ傷がついて、この世を宜よろしく申させられそうで、私も、うんざり。

様子を聞くと、伝がこの事を意趣にして、子分子方の奴等がしよつちゆう附け廻すんだそうですから、私あ堪らなくなつて、舟賃ひやくを一銭出して、川尻を渡つて 佃島つくだしまへ遁にげました。

佃島には先生、不孝者を持つて多いかこと苦勞をする婆さんが一人ね、弁天様の傍わきに吝けちな掛茶屋を出して細々と暮しています、子に肖にない恐しい堅気なんで。」

「何だい、それは、」

「私わつしの母親おふくろでございます。」

「それだもの。」

「へへへへ、今更いたし方がありません、そこへ転がり込んで、居縮みすくまって震えてたもんですから、愛吉どうしたんだつて、母親が尋ねます。」

これこれだといいますとね、それだから常日頃いつて聞かさないことではない、蟻じやあなし、毛虫じやあなし、水があつたつて対あいて手は渡つて来ます。しかし……鯰の伝……そ

れならば死んだ父爺おやじが御恩になつた深川の勝山さんへ出入をするから、彼家あそこへ行つて、旦那様にお頼み申して、伝にいい聞かしておもらい申して、お前の身体からだを無事なよう計らいましよう、父爺ちやんが亡くなつてからも暑さ寒さにやあお見舞を欠かしたことがないという、律儀はこんな時用に立ちます、で母親おふくろが取りあえず。」

二十八

「深川へ参りましたね、母親おふくろが訳を謂つて話をしますと、堅気の商人あきんどだ、遊人あそびにんな、んぞ対手あいてにして口を利けるんじやあないけれども、伝か、可よし、鯨ならば仔細しさいはないと、さらりと埒らちは明いたんです。

私わつしはこんなやくぎもの事ですから、母親も別に話さないでいたのがその時知れまして、そうか、そんな倅せがれがあるのか、床屋が家業と聞きやちようど可い、奉公人も大勢居ること、遊びながら働きに寄越すが可いと、深切におつしやつて下すつたので、二度目にはお礼かたがた、母親について伺いますと、先生、吃驚びっくりしましたぜ。

中庭でもつてきやつきやつという騒ぎ、女中衆さんよつたりが三四人、池の周圍まわりを駆けてるんで、

鬼ごっこがはじまつてるか、深川だつて呑気なもんだと、ひよいと見るとどうです、縁側
に腰をかけてたのは山の井の診察所で見た、別嬪べっぴんだらうじやありませんか。

そうして女中が遁にげるのを追懸おひけますのは、恐おそしい、犬でも蹴けそうな軍鶏しやもなんで。

今でも柳屋に飼かつてあります。強いことツたら御用の小僧うしろなんか背後うしろからはたかれて、
ぎやつといつて、打ぶつ坐まりませ。

心持こころが可ようございませ、とさかを立つてずつと伸のして、眼まなこをくるりと遣やりますとね、
私わたしでも取組とくみそうでさ。一体いっ気の勝かつた、お夏なつさんは痲かん癩しやく持もちなんだけれど、婦人おんなだ

けにどうすることも出来ないんですから、癩かなことは軍鶏かと私わたしとで引受ひけてるんで、ええ、
可ようござ、軍鶏かと愛吉あいきちとで請合まいましたと謂いうと、蒼あくなつて怒おこつてる時ときでも莞爾にっこりしま
さあ。

お夏なつさんは飛とんだその鶏とりを可愛いとがつてます。それから母おつかさん上うはいうまでもありません
が、生命いのちがけで大事だいじにしているお雛ひなさま様さまがありますよ。

十軒じっけん店で近頃出来合きんごの品物ひなじやあないんだそうで、由緒よしのあるのを、お夏なつさんのに金
に飽あかして買かつたつて申ましますがね、内裏うち様さまが一对いっ、官女くわんが七人しちお囃子はやしが五人ごです、それ
についた、箆たんす筒す、長持なが、挟はさ箱みばこ。御所車ご一いっツでも五十両ごしたツていいいますが、皆金みんな蒔まき

絵えで大したもんです。

このお雛様の節句と来た日にや、演劇しほいも花見も一所にして、お夏さんにかかる雑用ぞうよう、残らず持出すという評判な祭をしたもんですツさ。

私わつしが勝山あちらに伺うようになりました。翌あくるとし年おとし、一昨年おとしですな。

三月三日の晩、全焼まるやけにあいなすつた。「といいかけて、愛吉は四辺あたりをみまわしたが、浮かぬ色をした。

声も低く、

「しかも私わつしが行合せていたんです。十時じゅうじつころ頃でございましたね、お雛様を見せておくんなさいつて、勝手の方から。不断みなさん、皆様で可愛がつてくれますし、お夏さんも鼻屑ひいきにして下すつたもんだから、すぐにその何でさ、二階の座敷へ上りました。

目の覚めるような六畳は、一面に桜の造花つくりばな。活花いけばなの桃と柳はいうまでもありませんや、燃立つような緋の毛氈もうせんを五壇にかけて、炫まばゆいばかりに飾つてあります、お雛様の様子なんざ、私にや分りません、言つたつて、聞いたつて、ただもう綺麗で沢山。

お夏さんは直ぐその壇の下の処に雪洞ぼんぼりを控えて、立派に着換えていなすつたつけ。

あの内裏様のだつて、別に二個ふたつ蒔絵の蝶足のそうですな！……」

愛吉は卓子テエブルの上に四角な線を指の先で引いた。

「この位なお膳ぜんがありましよう、男雛おひなのと女雛めひなのと一對、そら、あの、」
金之助は熱心に耳を傾けながら頷いた。

二十九

「可うございますか、その一對の小さなお膳を、お夏さんが自分の前に置いて、もう一個の方を向うへならべて、差向いという形で居なすつたが、前には誰も見えなかつたんです。指を丸げた様な蒔絵の椀、それから茶碗、小皿てしおなんぞ、皆みんなそのお膳に相当したのに、種々ろいろ御馳走ごちそうが装つてありましたつけ。

その後病気で亡くなりましたが、あの診察所に附いていた年増ね、乳母ばあやというんじやあなかつたんですが、お夏さんのお氣に入で傍わきの処へ。もう二人、小間使が坐つて、これが白酒の瓶を持つてお酌をしてる、二ツ三ツ飲あがんなすつたか、目の縁をほんのりさせて、嬉しそうに、お雛様の飾りものを食べてる処で。

や、素敵なものだと、のほうずな大声で、何か立派なのとそこいらの艶麗あてやかさに押魂おつたま

消ながら、男おとこ氣このない座敷だから、私わつしだつて遠慮をしました。

いつものようにお台所へ下つてお末の出で尻ちりと一所に頂くべいとね、後退うしろりじきに出ようとすると、愛吉さん一ツあげましようかと、お夏さんが言つたんです。

まるで夢中、私あ腰が抜けたように突いきなり然なりそこへ坐りましたぜ。

さあ、一面の桜と、咲乱れた桃の中、雪洞ほんぼりの灯あかりで見たその時の美しさ。

しかも微ほつよ醉いと来ていましょう。もう雛壇ひなだんを退のけようという三日の晩、この間飾たのしつてから起きると寝るまで附添つきぞつて、階下したへも滅多にやあ下りたことのないばかり、楽たのしみ疲れれに気草くたげ臥たれという形なりで、片手を畳について右の方に持つてなすつた小こ杯さかずきを、気前よくつと差してくんなすつたい。

震えながら……まつたくですよ、震えながらそのお杯を受けようとすると、愛吉さんもうちつとそちらへと、傍はたから年増のが氣をつけたんです。

坐つたのは、お膳の前でしょう、これは先生。毎年々々そうやって差向いに並べても、向うへ坐つた奴はまだ一人も無かつたんだそうで。

お夏さんは朋とも友だちが嫌きらだつていうんです、また番頭や小僧が罷まかり出でようという場じゃアありませんや。

しかもその年、一昨年おととしですな、その晩にや私わつしより一足前さきに、雛の間で一人お客があつたんです。

何でも天下に聞えた立派な豪傑な爺じいだそうですが、旦那とは謡の方で、築地の宝生の師匠うぢの宅ね、あの能楽堂などで懇意になつてゐるんだつて謂いいましたよ。大層な雛だというのが、どれどれと押上がつて、やあ一人でやっていなさるの、私わしが相手をしようつて、そのお膳の前に坐りましたつさ。

お爺ちゃん、厭いやなこつた！ とお夏さんが屹きつとなつたので、傍はたの者はあツふあツふ、旦那も御新造ごしんぞう様も顔色を変えなすつたけ。ははあ、これは遣やられたと、肥おつた腹おわらから大笑おほわらを揺ゆり出して、爺さんは訳もなく座敷をかえ、階下したで今、旦那、御新造様などと一座で飲んでゐるといふ、その後でしよう。

だから年増は遠慮しろと氣を着けたんでさ。

するとお夏さんがね、可いいよつて、言いながら、白酒の瓶を取つて、お酌して酔わしてやろうや。莞爾にっこりしてお前まへ様、いえさ、先生！」

金之助は唾然として、

「口の端はたを拭ふけ、泡だらけだ。」

三十

愛吉は仇気なく平手で唇を横に扱いたが、すがめて掌を打眺め、

「嘘、泡なんぞ附着いてやしねえ。」

と例の愛くるしい口を結んで眉根を寄せ、吐息をついて歎息した。

「ほんとうに考えて見りや夢の様ですよ。」

お夏さんは酌をしておくんなさる気で瓶を持ちながら、ふと雛の壇を見ましたがね、どうなすつたんだか、おや！ といつてこう、瞳を据えて、瞬もしないでしばらく。

枕についても目をぱつちり、お雛様の番をして、すやすやと寐息に簪の花は動いても、

飾った雛は鼠一疋がたりともさせないんでございますつてね、過年もお雛様が皆で話をするツて、真面目に言いなすつたことがある位、凝つてるんだから魂が入つてましよう。

トその凝視めていなすつたツけ、ちよいとお囃子の人形が笛を落した、まあ、鼓を打棄つた、まあ、まあ、まあ、太鼓の撥を、あれ緋の袴が動くんだよ。あれ、皆！ とお

夏さんがすつくり立つた。

顔を見合せて皆呼吸を呑みましたわ。

その様子ツたら、まるで雛がどつと惣立ちになつたように、私等が胸に響いたんです。」
語る時、十有数日の間を蒸しに蒸した、人類の汗を絞り抜いた、一昨日来の気圧は、正にその極所に達したと見えて、陰々たる中にももの響、柱がきしむようである。

愛吉は肩をすぼめて、

「その途端に私等は雛壇が滅茶に崩れるんだと思ひましたね、火事だ、火事だと、天井の辺で喚いたと思うと、」

愛吉は穏かならぬ猿眼で、きよろきよろと四辺を見たが、たちまち衝と立上つた。

「先生、雨です。」という間もなく、硝子窓に一千の礫ばらばらと響き渡つて、この建物の揺ぐかと、万斛の雨は一注して、轟とばかりに降つて来た。

金之助も、話の変と、急な雨に、思はず顔の色を変えて唾を呑んだが、押出すように、「おお、雨だ。」

台の上のボオイは真先に飛び下りた、新聞を見ていたのは真中を掴み棄てて立つ。立っていたのは金袋の口を圧えて、この三人しばらくの間というものはただ縦横に土間の上を駆け歩行いた。白い姿の慌しく行交うのを、見る者の目には極めて無意味である

が、彼等は各々めいめいに大雨を意識して四壁の窓を閉めようとあせるのである。大粒な雫しずくは、また実際なまめ、斜ななめとも謂わず、直すくともいわず、矢玉のように飛び込むので、かの元はげ頭あたまの小男は先刻さつきから人知れず愛吉の話に聞惚ききとれて、ひたすら俯向うつむいて額をおさえているのであつたが、その手を放して天井を仰ぐと、怪訝けげんな顔をして椅子を放れて、窓の下へ行つて、これはまた故々わざわざ閉めてあつた窓の戸を一枚上へ押し上げて腰ひねを捻ひねつて、戸外おもてへ衝つつとその元頭もとあたまを突出すや否や、ぱつたり閉めて引込ひっこました、何条なま堪たまるべき、雫はその額かぶから、耳みみから、頤あぎとの辺あたから、まるで氷柱つららを植うえたよう。

かかる中にも自若しんじやくとして冷静の態度を保ち、ことさらには耳を傾けて雨を聞こうともしないのは彼等士官の一群ひとむれである。

ややあつて人々はあたかも軍人のごとく静まつた。

「障子しやうしをあけると、突いきなり然なり火の粉こなでしょう。」という声も沈むばかり、雨はいよいよ盛さかんである。

「お夏さんが一番しつかりして、そのまま、内裏様に手をお懸けなすつたが、愛吉、鶏とりつて一声。聞棄てにして私わっしあ二階から飛び下りて、二ツ三ツ人の体に打附ぶつかつたとばかし覚えています。ええ夢中でね、駆けつけたのは裏口にあるその軍鶏しゃもの疇とやなんですよ。

何を悟つたのか、ケケツケケツ、羽ばたきをしてる奴を引ひ掴つかんで両手で袖の下へ抱え込むと、雨戸が一枚ぼつたり内へ煽あおつたんですが、赫かつとして顔が熱かつたのも道理、見る間に裏返しに倒れ込むとめらめらと燃えてましよう。戸外おもては限かぎりもない狐火のようにちらちらちらら炎だらけ。はツと後退あとしきりに飛ぶ拍子に慌ててつんのめつて、仰向あおけに倒れたやつでさ。もう天井から紅あかい舌を吐いてるじやアありませんか。目が眩くらんだ足の処へ、箱だか、鉄瓶てつぺいだか重いものが斜はす違つかいに來て乗つかるといふ騒さわぎ。百年目だと思つた私わっしあ、板戸も壁も突破いきる勢いきおいで横ツ飛びに表の方へ刎はね出したんで、どしばたというのが地つちの底へ刻み込むように聞えるばかり。あツとも、きやつとも声なんぞはしませんでした。門かど口ぐちへ出ると道も空も土器色かわらけいろにぼツとなつて、処々段々にこうその隈取つて血が流れたように見えましたつけ。

その中をね、あつちこつち三四人、大きな蟻の影法師が映つたようにまるで酔ツぱらいの足つきで、ひよろひよろしながら歩行あるいてましたが、奇代なもんでございますね、道な

ら三町ばかり伸したと思うと、洪と火の粉が浴びせて来ました。鶏は脇の処で恐しい羽ばたきをしますね、私あその煽あおりで宙へ上りそうで足も地につきませんや。背後うしろの方でも、前途えの方でも、その時分によつたようワツという人声うづまが陰に籠こもつて聞えました。やがて私の身からだは何の事はない渦うずまいて来る人間の浪の中に巻込まれてしまいました。

右左透すきま間のねえ混雑みんまなんで、そいつあ皆みんな火事場の方へ寄せるんでしよう、私あ向うへ抜けようとするんでしよう。

突当るやら、蹠よろ踏けるやら、目も口も開かねえんで、何でえ！ 田舎ものが神田の祭にはぐれやしめえし、人ごみにまごまごする事あねえ、火事に逃げるたあ何の事だと、おされて剣突を食う癩かんしゃく癩かんしゃくまぎれに、立直たてなおして引返そうとする、と気が着きました。鶏を抱えてます、そいつはただ一言お夏さんに頼まれたから起つた事。

ホイ何のこつた、行くにも帰るにもこの騒さわぎに揉まれちやあ、羽も翼も坊主にならあ、と吃驚びっくりして、背後うしろは見えないで、抜ひけたり、潜くぐつたり、呼吸いきぐるしいほどの中をもぐつて出て、まず水のある処へ行きましたかね。

水ツてのは何、深川名物の溜池たためいけで、片一方は海軍省の材木の置場ばなんで、広ツ場ば。一体堀割の土手つづきで、これから八幡前へ出る蛇うねの蜿うねつた形の一ひとすじ条道ひとすじですがね、洲崎すさき

へ無理情死でもしに行こうツて奴より外、夜分は人通のない処で、場所柄とはいいな
がら、その火事にさえ、ちつとも人間が歩行きません。気のせいか、かつかつと燃える中
に、木竹の折れる音もするほど近間で居て、それで何と私の登音にばらばら蛙が遁げ込
みます。水の音を聞くと一杯のんだ気になつて、一呼吸吐いたんですが、——はてな。」

三十二

「そこでお夏さんだ、どうなすつたろう。私がこの慌て方じゃあ二階に残つた女連は気
絶たかも分らない。お夏さんはお夏さんで、雛を大切に取出しそうな権幕だったが、火
急にも何にも内裏様一個抱く時分にやあ、火の粉を被んなすつたに違いがないと、さあ、
心配になつて堪りません。」

矢でも鉄砲でも火事場へ飛んで帰つて、お夏さんの様子を見ようと、引返そうとすると、
抱えている鶏なんです。

先刻のあの場合にも、愛吉鶏をツてお謂いなすつた、どうしよう、これをまあ。
葛籠長持と違つて、人の家へ投ツ放しに預けて来られるんじやあなし、庇つて持ってい

た日にやあ、人混ひとごみの中だつてうっかり歩行あゆるかれるんじやあねえ。火の中から助け出したばかりで、跡をお去らばにして可い位なら、お夏さんがお頼みはなさるまいし、私わっしだつて頼まれる程の事じやあなし、困りましたね、どうも、何なんしろ活物いきものだから始末が悪かつたろうじやアありませんか。

人通のない土手だつて、軍鶏ばかり置いて行きや、どこへ去いつちまうも知れたもんじやアありませんね。見りや溜池の中に舟もあつたし、材木もありましたが、水死人どぎえもんを捜すように鶏を浮うかしとく数すうじやありません、持扱もちあいましたね、全く気が感じやあなかつたんで、一羽抱え込んで跣足はだしで池の縁をまごまごしてる風ツてのはありません、我ながら薄ぼんやり、どうしてるのかと思ひました。

火事はまだ盛さかんです。

すると灰のように薄赤い向うの路へ影がさして、四五人ひとならび一列いっぺんになつて来るのがあります。土手を横に切つて、あれから埋地にかかつた橋の、欄干が真まんなか中で切れて水へ折れ込んでいようという、ペンペン草の生えてる袂たもとへ寄つて、渡ろうとする時分にやあ私が居る間近になつたから見えました。

真先まつさきが女で、二番目がまた女、あとの二人がやつぱり女、みんな顔の色が變つてまぎ、

島田か銀杏返か、がツくり根が抜けて、帯を引摺つてるのがありますね、八口の切れてるのがありますね、どれもこれも小刻みに、歩行くと絡むのは燃立つでしょう。

一人々々に人形だの、雛の道具だのを持つてる、三人目の、内裏様を一对、両手に持つて、袖で搔合して胸に押着けていたのがお夏さん、夜目にも確か、深川中探したつて、およそその位なのは無いのですからね、……助かった。

つかつかと駈け寄つて、背後から、ちようど橋の真中へその一組のかかったのを、やあ、と私あ嬉し紛れに頓興な声を懸けました。

屹と立留つて、黙つて私を見なすつた、その時のようにお夏さんの、あんな気高い凄い顔を見たことはありませんでしたよ。鬢の毛も乱れています、それに、場所がそんなでしよう、天を焦す明でしょう。つい目の前にあの、愛吉、鶏をツて謂いなすつた二階の景色が見えるのに、急に變つてそれなんでしょう、こりや死んだ魂が直とこへ映るのか、そうでなけりやお夏さんの守護をして、緋の袴の連中が火の中から化けて来たのだ。」

「ちようどその時分下火になったと見えまして、雲が颯とかかったように、一面赤かった中へ黒味がさしましたわ、女連の姿は消えたよう、お夏さんばかりが判然と、ぱっちりとした目の色も見えて、私が手の鶏を御覧なすつたが、何、あとのは張詰めた気が弛んだか、足取が乱れて、あっちへふらり、こっちへひよろり、一人は危険な欄干に凭れかかりましたし、もう一人は何の事はない、そこへ打坐ってしまつたんです。手を取つて起して見りや、松ツていう女中なんで、怪しいも怪しくないも、場所だつて不思議はありません。

全体この橋も、池を渡つた向うも、旧はやつぱりその時分の勝山さんぐらいな御大家の庭だつたんで、橋がまた庭の景色の一ツだつたそうですが、馬、車なんざ思いも寄らず、人ツ子だつて通りやしません。ただね、材木を組んで筏を拵えて流して来るのが、この下を抜ける時、どこでも勝手次第に長鍵を打込んで、突張つて、潜るくらいなもので、旦那が買置なすつた。その中綺麗にして、藤棚の池へ倒れ込んでるのなんぞ直したら、お夏さんの祈禱所みたやうのもの、勝山さんだけの弁天様の堂を建立しようなんてね、いつていなすつた、その埋地へ遁げて来たんでさ。考えて見るとそれなんです、不意に打つかつた時はこの世のことじゃあないように思いましたよ。」

「大分涼だいぶんしくなつて来た。」と金之助は袖を合せて、想い出したように言いつつも、領うなずき領うなずき聞くのである。

「へい、凄わつしいような雨でございましたね、私わつしあどうなるんだ知らんと、お話をいたします内に気が変になりましたつけ、可いい塩梅あんばいでございます。

いいえ、私ばかりじゃあなかつたんで、火事場では、官女あとさきが前後を取巻いて、お夏さんが東の方に、通つたと謂う評判で、また勝山が焼けるちつとばかり前、緋の袴はを穿はいた素白まつしろな姿の者が、ちようどその屋根の上あたりを走るのを、汐見橋しおみばしの上で見た者があゝ、前兆だなんて種々いろんなことを謂つたもんです。

ようよう夜が夜の色になつて、湿つぽい風が吹いて来ると、御新造様、それから旦那が、あとさきになつて、女中が三人、私とお夏さんと、お雛様と軍鶏の居るその埋地へお見えなさいましたが、どなたも箸はし一本持つちやあいらつしやらないんで、追々集つた、番頭小僧、どれも不残のこらず着のみ着のまま。

もつとも私が二階を飛下りると、入違いに旦那と御新造様ごしんざんがお夏さんの処へ駆け上んなすつたつけ、傍はたに居た女中は助けてくれというんでしよう。手を合せてただ拝む程とちつてるのに、袂たもとのさきを口に啣くわえてお夏さんは悠々とお雛様を片付けていらしたつてね、

皆来い、お夏が死ぬ、お雛様だけ出しておくれと、お二人が一生懸命。

それですもの。

こういいますと、お夏さんが我儘三昧、親御は甘いばかりに聞えましよう、けれども因縁事なんですよ、だって勝山のものといったら、池に浮してあつた材木まで焼けツちまいましたから。業の火とかいうんですな、恐しいじやありませんか。

それでね、一度その埋地で家が寄つたが最後で、あとはもうちりちりばらばら。」

三十四

「雛は皆助かりましたし、飾の道具といったような物も、目立ったのは大抵出たんだそうですが、珠だの、珊瑚だので飾つた、天人が胸に掛けてるようなびらびらの下つた女雛の冠ですが、無くなつて、それから房のついた御簾のかかつてる結構な、一品で五十両、先刻も申しましたね、格別私なんでも覚えてる御所車がそれツきりになつたんですつて、いつまで経つても、お夏さんが太く気にしていますかね、もとより金目にかかわつたことじやありません、あの姉さんのことですから、へい。」

大方何でしよう、人並はずれて雛を大事がんなさるんでも分りません、そこらの様子でも知れますが、こう謂つちやあ何ですけれども、お雛様をまず恋しい方のようにでも思つてゐるんじゃないかありますまいか。

そうすると、あいて相手の女雛を自分ごっこにでも極めてゐるんで、その冠が失せたのも、許いなすけ嫁いの印かんざしの簪かんざしでも落したように思つてゐることでしょう、おんな婦人は天窓あたまの物と謂いますから、まこと実に碎けていて、ちつともみずからがらない女ひとだけれど、どこか恐しく品があつて、私なんざ時々我ながら頭つむりの下がることありますもの。

ねえ先生、御所車と冠がなくなつたのを、氣にして鬱ふさぐ位なのが、今更じやありません、んけれども、上野を歩行あいて、路傍みちばたで身体からだを洗つて、ちやぶ屋の姉やと間違えられて、癪たむすめの女を、ちよいと先生、お夏さんもさういつて話しなすつたが、山河内の姫ひいさま様という一件むすめものの女ですつさ。其奴そいつを煽あおがされるなんて可哀相じやありませんか。

いいえね、竜宮の乙姫てえ素ばらしいのだから、蜈蚣むかでにやあ敵かないませんや、瀬多の橋へあらわれりや、尋常の女でしよう、山の主が梅干になつて、木樵きこりに嘗なめられたという昔話がありますつてね、争われねえもんです。

全体ちやきちやきの深川こツ女が、根岸くんだりへ行つて、ももんじいに歌を習うなんて、

そんな間違つたことはないんです。郷に入つたら郷に従えだと、講釈で聞いたんですが、いかな立女形たておやまでもあの舞台じやあ睨にらみが利かねえ、それだから飛んだ目に逢うんでき。

それが先生、一体がお夏さんは、歌だの手習だのは大嫌だいきらいで、鴨川かもがわなんて師匠取をするんじやあないんですが、ただいま申しましたその焼け出されが只事ただごとじやアありません。前世ぜんせいの業ごうのようなんだから致し方はありません、柱一本立直らないで、それだけの身み上しやうがまるで0ひい。氣ばかりあせつていなさる中に旦那うぢが大病、その御遺言ごいごんでき、夏に我

儘をさせ過ぎた。行末が案じられる、盆画ぼんがなんぞ止よしにして手習をしてくれと、そこで発心をなすつたんだが、なあにもう叩き止めツちまうが可ようごす。その足で藤間へいらつしやりや、御自分の方が活きた手本になろうてんで、ええ私の仕返しや動かねえ縁切えんきりだ。お夏さんがこれから行こうたつて行かれやしません、さつぱりして可ようございます。へい、いちいちどうも難有ありがとうございました先生。

あなたのような紋着もんつきを着た方が、私等わつちたちを可愛がつて下さろうとは思わなかつたんで、柳屋たよりのも便にするものはなし、この頃は御新造ごしんざう様が煩わづらっていらつしやるなり、あの勝気なのが、めつきり瘦やせなすつた。

力ちからになろうというのが私わつしと軍鶏ぐんけいだから困わづらつちまう。」と、つくづく腕うでを組んであどけな

い、罪のないことを真心から言つて崩折れた。真面目な話に酔もさめたか、愛吉は肩脛を内端にして、見ると寂しそうで哀である。雨は霽れた、人は湯さめがしたように暑を忘れた、敷居を越して溢れ込んだ前の大溝の雨溜で、しつこい叩の土間は一面に水を打つたよう。

三十五

愛吉がいう処も、大雨の後をそよ吹く風も、太く身に染みた様子であつた、金之助は改めて硝子杯を挙げ、「もう一杯景気をつけよう、大分引込まれて私まで妙になつた、お前にも似合わない何も鬱ぐにも当るまい、」と、激ます人も何となく理に落ちて来たのである。

「ええ、この位にしておきましょう、何年ぶりかで不思議にこうやって折角真面目になつたものを、また酔つちやあ詰りません、ねえ先生、どうぞ可愛がつて下さいまし、私はくらい酔つてそれなりけりでも構いませんが、お夏さんはほんとうに誰も便にするものがないんですから、後生でございます。旦那方のような紋着を着た方は大嫌なだけけれど、何、

実の処は私等を輕蔑して取合つて下さらないと相場が極きまつてるとおもいますから、じゃじや馬ですねてるんでさ、心細うございます。ほんとうにお夏さんなつさんは便りのない身でおいでなさるんですからね、御不便ごふびんがありや、直ぐにでも柳屋へ引張つて行つて見せてえや、そしてこの先生がお前さんのことを身に染みて聞いて下すつたつて話したら、どんなにか喜ぶでしょう。」とさも懐しげにいうのである。

金之助も他所事よそごととは取らない気色けしきで、

「いや、私はこれでなかなか当世じやあないんだから、女の児ことお附合はちつと困る、しかしお前とは改めて朋達ともだちになろう。なあ、朋達——そうだ親類からだとでも何とでも思いなさい。用に立つことがあつたら出来るだけ智慧ちえも貸そうよ、身体からだも貸そうよ。込入つた話でそのお夏さんのことについてちや、こりや懸直無かけねし私も一ツもの思いだ、帰つてからも路々も条すじを辿たどつて考えよう、いやしかしお底かげでおもしろい……といつちやあ濟まないような氣もするね。」

「はい、」といったツきり、愛吉はしばらく差俯さしうつむ向むいていたが、思出したように天窓つむりを上げて、

「飛んだ頂きました、もう御免ごうむを蒙こうむります。」

「一所に出ようか、そこいらまで同じ向だ。」

金之助は愛吉が返した、根岸の鴨川の討入の武器なる黒系緘おどしの五ツ紋を、畳んであるま懐へ捻ねじこ込んで、ボオイを呼んで勘定をすると、件くだんの金袋を提ひげたのがその金袋は蓋けだし代金を受納めるために持っているのではなく、剩つり金を出す用意をしているもののように、規則正しく返したのに、銀一ツ添えて金之助はここに長座を償かつたが、断るまでもなく、ボオイはこれを別の衣兜かぐしに納いれたのである。

「御機嫌よろしゆう、」

それと二人は卓テエブル子さしはさを挟ひんで齊ひとしく立上あつたのが、一所になり前後あとさきになつて出ようとす、横合の椅子から、

「やあ、」と声を懸けたのは、件くだんの元はげ頭あたまの小男であつた。

金之助ははじめて心着いて、はたと立留たつて顔を見て、不意だという面色おももちで更に見直したが、

「おお、どうして、」と驚いて言った。

ここに先刻さつきからおみこしを据たえて、愛吉の物語に耳を傾けたり、士官の方をじろじろ見たり、あるいは空そら合あひを伺かつてびつしよりの奇観を呈するなど、慌あてたような、落着いた

ような、人の悪いような、呑気なような、ほとんど端倪すべからざる、たとえば竜のごとき否、むしろ大雨に就いて竜を默想しつつありしがごとき、奇体なる人物は、渾名を外道と称えて、名誉の順風耳、金之助と同一新聞社の探訪員で、竹永丹平というのであった。

三十六

軒の柳、出窓の瞿麦、お夏の柳屋は路地の角で、人形町通のとある裏町。端から端へ吹通す風は、目に見えぬ秋の音信である。

まだ宵の口だけれども、何となく人足稀に、一葉二葉ともすれば早や散りそうな、柳屋の軒の一本柳に、ほつかりと懸っている、一尺角くらいな看板の賽ころは、斜に店の灯に照されて、こつちへは一が出て、裏の六がまともに見られる。四五軒筋違の向う側に、真赤な毛氈をかけた床几の端が見えて、氷屋が一軒、それには団扇が乗つてるばかり、涼しきは涼し、風はあり、月夜なり。

氷屋の並びに表通から裏へ突抜けた薬屋の蔵の背があつて、壁を塗かえるので足代が

組んである、この前に五六人、女まじり、月を向うの仕舞屋しもたやの屋根に眺めて、いずれも、蹲つくばつて雨上りに出た臺ひきがえるという身で居る。

「え、もし。」

「さようでございますね、」

「どうでしょう、」

と口々にどれが何をいうのか知らず、低声こごえでひそひそ。

「ねえ、おい、」

「どうだろう、」

「そうさな。」

時々吸殻が呼吸いきをして、団扇が動くわ。

「構わず談じようじやあねえか、十五番地の差配おおやさんだと、昔気質かたぎだから可いいんだけれど、町内の御差配ごさいはいはいけねえや。羽織袴ステッキで杖ステッキを持つとうという柄えいだもの、かわつて謂いつてくれねえから困るよな。」

「むむ、だが何しろ打棄うつちやつちやあ置かれめえ。」

「もし、確いに不可けますまいね。」

ちと老けた声で、

「されば宜しくござりません、昔から申すことで、何しろ湯屋で鐘の音を聞くのさえ忌むとしてござります。」

「そして詰る処、何に障るんですね。」

「いえはじまりは地震かと思うてびくびくしていたんで、暑さが酷かったもんだからね。それという時の要心だ、私どもじゃ、媽々にいつけて、毎晩水瓶の蓋を取って置きました。」

「へい、火事ならまあ、蓋を取る内も早いのが可いというんでしょうが、地震に水瓶の蓋を取って置くはおかしいね。」

「理詰じやあねえんでさ、まずいわばお禁厭さ。安政の時に家中やられたのが、たった一人、面くらつて水瓶の中へ飛込んだ奴が、不思議に助かったと謂いますからね、よくよく運だ、あやかるだけでも可うございましょう。」

「お待ちなさい、して見ると鉄さん。」

「ええ。」

「お前さんがこの頃また毎晩色ものの寄席へ行くのはやっぱりそこらの地震除から割出し

たもんだね。」

「何故、何故、ええ御隠居。」

「麴町の人だがね、同一その安政年度に、十五人の家内でたった一人寄席へ行つていて助かつたものがありますわい。」

「ざまあ見やがれ、俺が寄席へ行くのを愚図々々吐しやがって、鉄さんだつてお所持持だ、心なくツて欠厘でも贅な錢を使うものかい、地震除だあ、おたふくめ、」

「おや、それじゃあ地震よけに、いつも寄席に行つて、お前一人助かる気かい。」

「何だと。」

「いいえさ、お前一人助かれば女房は可いのかよ。」とそのかみさんか、女の声。

三十七

「べらぼうめ、何を、何をいつてやあがる、」と、何か言つていやあがる。

「鉄さんぐうの音も出ずさ、こりやお時さんが道理だ、はははは、」

齒の抜けた笑いに威勢の可い呵々々が交つて哄となると、件の仕舞屋の月影の格子戸の

処に立っていた、浴衣の上へちよいと^{あわせばかり}拾羽織を引掛けた^{ひっか}艶な^{えん}のも^{ほほ}吻々と遣る。実はこれなる御隠居の持物で。

鉄と謂われたのはやつきとなり、

「やい、じゃあ^{うぬ}汝あどうだ、この間鉄砲汁をやツつけた時一^{ひと}箸も食やしめえ。命取だ。恐しいといつて身^{みぶるい}震をしやあがつて、コン畜生、その癖俺^{おいら}にやあ三杯と啜^{すす}らせやがつて、鍋底をまた装^もりつけたろう、どうだ、やい、もう不可^{いけ}ねえだろう。勿体ない打^{うち}棄^ちった処で犬だつて困るだろうと謂つたじゃあねえか、犬だつて困るよ、命取をよ、亭主が食つてるのを見て汝一人助かりや可いのかい、やい、七面鳥。」

「東西！」

「さあお家の乱れだ。」

「さてはこの前兆かッ。」

^{かたわら}傍より、

「もし何でございます。」

「^{ひんけい}牝鶏のあしたすると言つて、^{めんどり}牝鶏が差し出るからよ。」

「ええ、牝鶏があしたなら構いませんが、こうやつて^{つむり}頭を集めているのは、柳屋の^{おんどり}雄鶏

が宵啼よいなぎをするからでございませぬ。」

「うう成程、雄鶏だっけの。」

「御串戯ごじょうだん、」

「これはやられた。」

「皆みな様笑いごとじやありませんぜ、火に障るつていうのじやありませんか、ねえ御隠居。」

「されば……謂うて。」

「御隠居さんなんざ齒に障りましようね、柳屋のは軍鶏しやもだから。」

「誰だ、交ぜるない、嘉吉かきちが処とこの母親おふくろさえ、水天宮様へ日参をするという騒さわぎだ。尋常事ただごとじやあねえ、第一また方に一つ何事もないにした処が、心持が悪いじやあねえか、宵啼よいなぎなんて厭いやなものだ、ほんとうにどうかししようじやあねえか。」

「どうするツて、殺しつちまえば可いいでしよう。」

「そうだとよ。」

「それはもう禍わざわいの根を断つわのだから、宵啼をする鶏は殺すものとしてあるわさ。」

「そこで、」

「謂つたつてあの女が肯くものか、どうして可愛がることといったら、
恐しく声を密めて、」

「御隠居の前ですが、お内の猫ぐらいなものじやアありませんぜ。」

「まずの、」とあやふや。

「だから差配さんに懸合つてもらつてよ。」

「その差配さんが今謂う杖だ。」

一段声を張上げて高らかに策を献ずるものあり。

「交番々々。」

「馬鹿をいえ、杖でさえ不可ねえものが、洋刀で始末におえるかい。構うこたあない、
皆で押懸けて行つてあの軍鶏を引奪くツてしまふとするだ。」

「大勢でか、ちと変だな。」

「何さ、対手がどうというんじやあないが、一人や二人ではさすがに話しくいて。」

「気の毒なり、可哀相でもあり、」

「まあ、何にしろ困つたものだ、今夜にも宵啼が留みさえすりや、ああもこうもないんだ
けれど、留まなきやあ、事のねえ内よ、気の毒だが仕方がねえ。」

風はさらさらと軒を渡つて、ああ、柳屋で鶏が鳴く。

三十八

「蔵人、蔵人。」

涼しい声で、たしなめるように呼懸けながら、店の左手に飾った硝子戸の本箱に附着けて、正面から見えるよう、雑誌、新版、絵草紙、花骨牌などを取交せてならべた壇の蔭に、ただ一人居たお夏は、小さな帳場格子の内から衝と浴衣の装で立つと齊しく、取着に筆筒のほのめく次の間の隔の葭簀を蓮葉にすらりと引開けて、ずっと入ると暗くて涼しそうなかへ、姿は消えたが、やがて向直つてつかつかと店へ出た、乳のあたりにその胸を置かせて、翼に手をかけ抱いたのは、お夏が撰んで名をつけた、蔵人という飼鶏である。「何故今時分啼くんだね、」と人にものを謂うような、されば宵の一声にお夏が忙わしく立ったのは、あたかも寐かしたつけた嬰兒が、求めて泣出すのに、嫁がその乳房を齎らすのごとき趣であつた。

「お前、寂しいのか。」

淋さみしいのかと謂いつて、少しく抱きあげて、牙きばのごとく鋭くちばしき嘴くちばしにお夏は頬ほの触ふらぬばかり、
「私わたしだつて店ひitoriに独ひとりで居ゐるんだもの、我儘わがままでございますよ。」

くるくると動かす蔵人の目は光つて、ものに動うざる風情あり。

「おつかさん、あんばい、
「母様は塩あんなばい梅あんなばいが悪いし、寝ていらつしやるじやありませんか、人がね、宵啼よひなげをするツて忌いやがります。不可いけないよ、厭いやだよ、幾いくたび度言つて聞かせるか知れないのに、何故言いうことをお聞きでない。」

と品ある目で屹きつと見たが、傾かたけている片頬かたほから顔の色が和やわらいで、

「灯あかりを見せてあげようね、宵よひツ張はりたらないのだもの。」

店の真まんなか中なかへ二足三足、あかり前さきへ、お夏は釣つり洋燈ランプの下もとに立ち寄よつた。新版ものの表紙みせ、錦絵の三枚続つづき、二枚合せ、一枚もの、就なかんずく中なか飼鷄かひがぱつと色彩を放はなつて、金、銀、翠みどり、紅、紫、あらゆる色のここに相応あはずる中に、墨絵に肖にたる立姿は、一際水が垂りそうである。

「お祭だわねえ、灯あかりがついて賑にぎやかだろ。」

飼鷄は心あるごとく炫まほゆい洋燈ランプをとみこう見た。楯たてをも碎くだくべきその蹴けつめ爪つめは、いたいたしげもなくお夏の襟えりにかかつている。

「あつちを御覽、綺麗じゃあないか、音羽屋だの、成田屋だの、片市……おやおや誰かの姫君様といったような方がいらつしやる、いやに澄してさ、高慢な風じゃあないか、お前知ってるかい、何が合点さ、」と言いかけて打微笑み、

「何にも分らない癖に、おもしろいかい、そうかい。これは相撲の番附、こちらが名人鑑、向うが凌雲閣、あれが観音様、瓢箪池だつて。喜蔵がいつか浅草へ供をして来た時のようだ。お前あの時分はおとなしなかつたつて、この頃はまるで嬰兒のようじゃあないか、夜啼をして、良い児だからもうちつと遊んだらあつちへおいで、可いかい。夜になつて疳へ入るのは何もかわつたことはないけれど、何だか淋しそうで可哀相だねえ、母様と二人ばかりになつたつて、お前、私が居れば可いじゃあないか。」と、いつか独言をいいながら段々軒に近づいた。

「まだ見たいのかい、さあ、何にしよう、これは軍の絵でございます、」と謂つてお夏は胸を反らし、黒目勝なのを仰向くと同時に、両手で上へ差上げたが、翼の尖が鬢にかかつて、

「あら髪がこわれるよ。」と思わず手を放した、飼鶏はどんと身を落して、突立つて土間へ下りた。

三十九

溝石で路を劃くつて、二間ばかりの間の軒下の土間に下りた、藏人は踏留まるがごとくにして、勇ましく衝つと立ったが、秋風は静々と町の一方から家毎やごとひの廂を渡って来て、ちようどこの小さな散ちりぎわの柳を的あてに、柳屋へ音信おとずれたので、葉が一斉に靡なびくと思うと、やがて軍鶏おとしげの威毛おののゆらを戦たたかき揺いで、それから鶏を手から落した咄とつ嗟さの、お夏の水髪を二筋三筋はらはらと頬ほに乱みだして、颯さつと吹いてそのまま寂ひっそり寞も。

この名残なごりであろう、枝に結えた賽さいころは一ツくると廻まわって、三が出て、柳の葉がほろりと落ちた、途端に高く脚をあげて、軍鶏は店みせ前まへをとツとツと歩ある行き出した。

お夏は片手について腰をかけて、土間なる駒下駄の上へ一ひとひら片の雪かとはかり爪先おもひをかけて、うっかりとなつた。フトその飼鶏を念頭から奪い去られたのであろう、もの思おもひをすめる人の常として、こうは思いがけずしばしば心を失うのである。

その間に軍鶏の健脚は、猫の額のごとき店みせ頭あたまを往復することをもつて満足が出来なくなつた。

かつて黒旋風愛吉をして、お夏のいちだく一諾を重おもんぜしめ、火事のあかりの水のほとりで、夢ゆめうつつの境に誘いざなつた希代の逸物いちもつは、制する者の無きに乗じて、何と思つたか細溝ひとまを一ひとまに跨たぎに脊伸びをして高々と跨たぎ越して、小路の真中へずつと出て、あたかも西側を離れて、これから東側へ廻ろうとして、狭い町の屋根と屋根との中空へ来た、月の下にすつくとこそ。

土蔵の前に集つた一団の人の驚きは推するに余りある次第であろう。

渠等かれらが額を集め、鼻を合せ、呼吸いきをはずませて、あたかも魔界から最後の戦たたかいを宣告されたように呶々どどしている、忌むべき宵啼の本体が、十間とは間を措かず忽然こつぜんとして顛あらかれたのであつたから。

あまつさえ這個しやこの怪禽は、月ある町中へつツ立つと斉ひとしく、一振りふつて首のぼを伸して、高く蒼空あおぞらを望んでまた一声、けい引おう！ と叫んだ。

これをしも忌み且つ恐れたる面々は、鳴声があとを引いて、前町裏町すべて界隈かいわいの路地の奥、土蔵の隅、井戸の底、屋根裏、階子はしこの下、三階、額の裏、敷居、鴨居かもいの中までも遠く響いて押拵ゆがつて行くに連れて、次第に霧きりが起り、月がかくれて、ほとんど名状すべからざるありさまに變ずるがごとく見て取つた。

鶏鳴けいめい暁を報ずる時、夜のさまが東雲しののめにうつり行く状さまは、いつもこれに変わらぬのであるけれども、月さえやや照てらし初そめたほどの宵の内に何事ぞ。

宵啼をもつて、火の神の町を焼く前駆とする者の心には、その声の至る処、路地の奥、土蔵の隅、井戸の底、屋根裏、階子の下、三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも、燃えんとして火氣はびこの蔓り伝わる心地がして、あわれ人形町は柳屋の店を中心として真黒まっくろな地獄に変わるであろうと戦慄せんりつした。

「ワツ！」

古浴衣を蹴返して転がるように駆出したのは、町内無事の日参をするという、嘉吉とこが家の婆様じや。

四十

と見れば白髪を振乱し、頤おとが細いつて瘦やせさらばい、年とし紀六十に余るのが、肉ししの落窪おちくぼんだ胸むねに骨ほねのあらわれたのを搔かいはだけて、細帯ほそおびばかり、跣はだし足あしでしかも眼まなこが血走まじりり、薪まき雑ざつ木ぼくを引ひ搦なんで、飛出ひしたと思おもうと突いき然なり、

「火事だ、」と叫んで、軍鶏を打とうとしたが、打外した。

蔵人は咄嗟に躲して、横なぐれに退つたが、脚を揃えて、背中を持上げるとはたと婆に突かけた。

「火事だ、」

また喚いて件の薪雑棒を振廻す、形相あたかも狂者のごとく、いや、ごとくでない、正に本物である。蓋し小金も溜つて、家だけは我物にしたというから、人一倍、むしろ十倍、宵啼に神経を悩まして、六日七日得も寝られず、取り詰めた果が逆上をしたに違いはないので。

白髪は飛んで、翼は乱れた。あれよと見る間に、婆と軍鶏と、とんと当り、颯と分れて、月下にただぐるりぐるりと廻つた。

「汝、業畜生、」と激昂の余り三度目の声は皺喰れて、滅多打に振被つた、小手の下へ、恐気もなく玉の顔、夜風に乱るる洗髪の島田を衝と入れて、敵と身体の擦合うばかり、中を割つて引懸けにぐいと結んだ帯の背後へ、軍鶏を庇つたのはお夏である。

「お婆さん何をなさるんです。」

ちよいと横顔で振返つて、

「叱！」

軍鶏も窘むようであった。婆は恐しい目をしながら、胸に波を打たせて肩で呼吸だ、齒を喰緊めて口が利けず。

かかる処へ殺気を籠めて、どこどかと寄せて来た、お夏と蔵人とを中に、婆の右左へかけて取巻いたのは土蔵の前に居た連中。

「何だ、火事だ。」

「火事だ？」と口々に尋ねたが、これは事件の緒口を引出そうとするに過ぎない、皆々は云うまでもなく、その間の消息を解していた。

「こ、こ、こいつじや、火事はこいつじや。」

人数が襲い来ったので思わずおさえていた袂が弛んだ、お夏の手を振放して、婆は蔵人に躍りかかった。

「何をするんですよ。」

遮ろうとするお夏の帯を、ぐいと留めた者がある。同時に婆を突退けて、

「まあ、待ちなさい、」と一名。

発奮をくらい、婆は尻餅をついて、熟柿のごとくぐしゃりとなつたが、むつくと起き、

向をかえると人形町通の方へ一文字に駆け出した、且つ走り、且つ声を絞って、

「火事じゃ、火事じゃ。」

「あれ。」

嬰児を懐にしつかと圧え、片手を上げて追懸けたのは、嘉吉の家の女房である、亭主その晩は留守さ。

「さてお夏さん、思切っておくんささい、二三日前から薄々様子は知っていなさろうがね、町内じやあ大抵気にするツたらないんだから、一番ね、思切って私等に鶏をおくんささい。何も宵啼をすりやこうと、政府からお触が出たわけじゃないけれども、可うがすかい、心持だ。悪いことは謂いませんや、お前さんのお為にその方が可かろうと思うからね。」

お夏は黙って罎の中に居るのである。

四十一

「どうです、御承知だろうね、町内じやあお前さんの家が第一新顔だから、何かその辺にものでもあるように思われては迷惑、可うごすかい、分りましたろう。」

「軍鶏これを寄越せつて謂うんですか。」

「さようさ。」

「連れてつてどうなさるの。」

「占めるんでえ、殺やつちまうんでえ。」

と鉄だろう、打ぶちつけた。

慌おもいて騒ぐと思の外、お夏は莞爾にっこりして、

「不可いけませんわ。」

「不可ねえと！」

「まあまあまあ、静かに言つても分ることだ。もし、不可ませんなんてそう平気でいられちやあ困るじやあごわせんか。一体、母おつか様に懸合おつかう筈はずなんだけれど、御病人だからお前さんだ、見なすつたろう、嘉吉とこさん許とこのなんざ、あの騒さわぎ。」

「御免なさいな。」となお笑いながら平気なもので、お夏は下に居て片袖たもとの袂たもとを添そえて左手んでを膝んでに置いて、右手めてで蔵人そびらの背なを撫なでた。

「仕ようがないねえ。」

顔を見合せたのが二三人、談判委員もちと案外という語気で、

「呑氣のんきにどうも軍鶏はなしと談はなしなんかしていられちや困りますよ、ちよこまかした事とは違ちがいませぬ。」

お夏は振仰いで、

「ですから御免なさいまし。」

「あやまるの、あやまらないのというような岡おかつたるいこつちやあないんだというに、困つちまうな。」

「私わたしだつて困こまつている、」とお夏も差俯さしうつむ向むいた。

「月夜かどで門かどへ寄合よあつたという条、大きな野郎やろうが五人三人、こうやって来たんだから、よくよくの事だと思おもいなさい、ね、さき、これが一番わがり分わりが早い、分わりましたか。」

退引のつびかせず詰寄つづるに従したがつて、お夏はますます庇かば立だて、蔵人くらひに押被おつかぶさるばかりにしつ

「もうきつとですよ、きつと鳴なきはしませんよ、大丈夫だよ。私がよく言いつて聞きかせますから。」

「おやおや、この上軍鶏たまと話わなんぞされて堪たまるものか、気味きの悪い、何なにてツたつてどうせ助たすけてはおかないんだ。へん、言いつて聞きかせる、人間にんげんの言いうことを肯きいて鶏けいが鳴なかないよ

うなら、勝手の悪い時は夜が明けねえや。」と嘲笑った者がある。

お夏は屹と見て、

「何、」

「何、何たあ、何たあ何だい、経師屋の旦那に向つて、何たあ何だい、そんな口は軍鶏に利け。」

「はい、軍鶏の方が、お前さん方より余程いうことが分りますよ。」

「皆様。」

一同の眼はお夏に注いだ。

「面倒だ、ヤツつけましょう、可いや、手籠が悪いという方がありや後でまた対手になる、留めなすつたつて合点しねえ、さあ、退け。」

腕まくりをして掴みかからんず権幕であるのに、お夏は更に意に介しないか、眼あるものならば面をも向けられないほど、品ある顔に笑を湛えて、

「それでもほんとに分らないんだもの、あやまつたら可いじゃありませんか。」

自ら疑わないうことまたかくのごときはあるまい。まさに突飛ばして軍鶏を奪わんとした男も、余りのことに手が出なかつた。

それが猶ためら予つたので、かえつて傍はたからいきり出した。あっちこっち耳ツこすりをして、

「エ、」

「さようさ。」

衆議一決。

四十二

兩人あり、その時、挟さしはさんでお夏の左右より、斉ひとしく袖を引いて、

「さあ放した、退どかないか。」

「余り強情を張りなさりや仕方がない、姉さん、お前さんの身体からだに手を懸かけますよ。」と断たつて立懸たちかかる、いづれも門かど札ふだを出した、妻子もあろうという連中であるから、事ことここに及んでも無法に拳こぶしは握らぬので。

「何をするのよ。」

「いや、どうもしねえ、そん畜生を渡せてえんだい。」

「これ。」

「厭いやですよ。」

「厭？ 一人前の男に向つて、そんな我儘な挨拶があるものか。」

「分らなけりや分らないで、可いから町内の交つきあ際あいというものを教えてやろう。」

「姉さん、虫の薬だ、我慢しな。」

「厭、」という時、黒髪は崩るごとく蔵人の背せなに揺れかかつて真ま白しろな腕かひなは逆に、半身みもた捻ねじれたと思うと二人の者に引ひ立たてられて、風に柳の靡なびくよう、横よこざまに身み悶もえした、お夏なつはさも口く惜やしげに唇を歪めたが、眦まなじりをきりりと上げて、

「私を、……私を、……私を、……」と怒いかりを帯びた声強く、月に瞳を見据えたが、颯さつと耳み朶みたぶに紅を染めた。胸を反そらして、雪なす足を折曲げて、

「あ痛い々々々々。」

たちまち血の気は頬に消えて、色は一際白しろずむのである。

「虫殺しだ、ちつたあ痛いえや。」

「掴つかえまツちまいなせえ、」とお夏を押えたのが早速の懸声、それもこれも瞬まく間で。

「危あぶねねえ、わツ！」

といつて、今、お夏を引ひ立たてたのを見るや否や、軍鶏うなの頸じを捕えようとした鉄は、両の

掌てのひらで目を蓋ふたして背後うしろへ反そつた。

軍鶏はその肩の辺りまで素直まっすぐに宙へ飛んだのである。

その脚の地に着くともろともに身を翻ひるがえしてどんと突くと、

「おツ、」と喚わめいて、お夏の腕かひなを捻ねじっていたのが手を放して飛退とびさがると、袖が断きれたか、

とぐいと払って、お夏はいま一人を振放して、つつと月影に姿を消したが、柳の下を潜くぐる

が疾はやいか、溝を超えて、店へ駆け上ると奥へ入った。

後を追って、奇異なる断きれぎれ々の声を叫びながら駆け出した蔵人を、ばらばらと追詰める

連中の、ある者は右へ退のき、ある者は左へ避け、三人五人前後に分れて、賽さいの目のように

散らばった。

要こそあれ滅多あたりこぶし当に拳を廻して、砂煙うずまの渦くばかり、くるくる舞して働はたらきながら、背後うしろ

から割きって出て、柳屋の店頭みせさきに突つつた、蝸げ蜒げ眉まゆの、猿さるまなこ眼ひょうの、豹ひょうの額ひょうの、熟柿じゆくし

の呼吸いきの、蛇の舌うづまの、汚わかい若わかしゆ衆しゆを誰とかがする、紋床やつこの奴愛吉だ。

「待ちやあがれ此奴等こいつら、私わたしが出入先をどうするんだ。」

奥おくから引返ひっかえして出たのはお夏、五七人の男を対あひて手に、いかに負けじとてどうする事ぞ、

右みぎ手に長煙草ながぎせるを提ひっさげたり。かねて煙草は嗜たしまぬから、これは母親の枕まくら辺ちべにあつたのだ

ろう、お夏はこの得物を取りに駆込んだのであつた。

「お嬢さん。」

「愛吉か。」

そのまま店から下りそうなるを、びつたりと背^{せな}でおさえて、愛吉は土間一杯に身構えながら、件^{くだんさい}の賽の目のごとき足並の人立に向つて、かすれた声、

「やい！ 何方様^{どなたさま}もよくおいで遊ばされやがったね、へへへへへへ、何御用でございませうか、仰せ聞けられまし、へへへへへ。」

四十三

「……七錢三厘、二錢、五錢、十五錢、一錢、二十五錢、三十錢、可^いいかい。」
 「へい、可^ようございませう。」

愛吉は神妙に割膝^{かしくま}で畏^{そろばん}り、算盤^{はし}を弾いている。間を隔てた帳場格子の内に、掛^{かけ}硯^{すずり}の上で帳面を読むのはお夏で、釣洋燈^{つりランブ}は持つて来て台の上、店には半^{はん}蔀^{しとみ}を下してある。

「十銭、十八銭、四十銭、五十八銭。」

「旨えもんですぜ。」

「こんなに遅く読むのを置くのじゃあないか、ちつとも旨いことはありやしない。」

「いいえさ、商もこうなりや、占めたものだというんでさ。」

お夏は何にも謂わないで微笑みながら、

「八銭、七銭、五銭、合せて十二銭、三十二銭、十六銭。」

愛吉慌しく急込んで、

「おっと！ と。」

「またかい。」

「大概可うがすがね。」

「算用が大概じゃあ困るからね、また遣損なつたんでしよう。」

「ええと、今何でさ、合せてなんて、余計なことを言いなすつた時、拇で引懸けて、上が

下りて一ツ飛んで入りましたつけ。はてな、」

お夏は帳場格子に肱をついて、顔を出して、愛吉が手なる算盤を差覗いた。間近に照らす洋燈の明に、と見れば喧嘩の名残である、前髪が汗ばんでいた。頬にかかるのは愛

嬌毛ようげで、

「幾ツ入違えたの、お直しな。」

愛吉は小指でちよいちよいと耳を搔かき、

「珠を幾つ遺損なつたか、それが分りますと可うがすがね。」

お夏は肱を掛硯の上へ支つき直して、明あかりうしろの後へ胸を引いた。

「もうこつちへお超越しなさい。」

愛吉は一議もなく、算盤と一所に額を突出し、お辞儀をして、

「どうぞ願います。」

入違いにぽんと投出す、帳面を受取つて、愛吉は膝の上。

「読みますぜ。」

お夏は前髪の下へ、美しい指を一本、珠を狙つて傍目わきめも触ふらず、

「さあ、」

「しつかりおやんなさい。」

「ああ、」と真面目である。

「えゝと、こうだに寄つて、はじまりから遣りますよ、拾銭なり也。」

「ああ、」と置く。

「八錢八厘也、可うがすかい。」

「ああ、」と置く。

「三十五錢也。」

「ああ、」と置く。

「それから二十八錢也。」

「ああ、」

愛吉は目を擦こすつた。

「お嬢さん、貴女あなたは手習はからつぺただつていうんですが、この字は細くつて綺麗ですね。」

「ああ。」

「おつと、また二十四錢也。」

「ああ、」と置く。

「違つた、二、二、二、二十二錢、そう、そう。」

と独りで狼狽うろたえて独ひとりで落着く。

お夏は後生大事に、置いた処を爪つま紅べにの尖さきでおさえながら、

「ちらちらするね、きつと飲んでおいでだよ。」

「おつと、八錢也。」

早速珠を弾いて、

「ああ、」

「どうも一ツ一ツ、ああと返事をなさつちやあ、その間にぽつぽつ、私わなんざ及びつこな
し、旨いものです。」

「旨いもんです。」とお夏は珠を凝視みつめたままでにっこり莞爾する。

愛吉はけろりとして、

「お次が二十八錢也。」

四十四

「お夏や。」

折から奥で衰えた声して呼んだのは、病の床に臥ふしているという母様おつかさん。この声を聞くと、

愛吉は胸を折つて、肩の中へ頸うなじを縮めて、口をむぐむぐと遣る。お夏はこれを見ぬようにしてちよいと見ながら、

「おつかさん
母様。」

「おお、いいえ、来るに及びません、勘定をしておいでか。」

「はい、」と軽く言う。

「御苦労だの。」

「母様、今夜は愛吉が来てくれましたして、種々いろいろあの交ぜかえしたり、下手な算盤を置いたり、間違つたことをいったりしますから、おもしろくツて可ようございますよ。」

「酷ひどいことを、」と口の裡うち、愛吉は苦い顔をして、お夏を怨うらめしそうに見る目をぱちくり。

「愛吉、難ありがた有うよ。」

「これは、」と額を押えたが、隔てていれば見えもせず、聞えもせず、目まのあたりのお夏にはどんなに可おか笑かつたろう。

「母様、愛吉があんな風をいたします。」

愛吉はじたばたしたが、くるりと坐り直つて奥かたの方に手をついた。

「どういたしまして、ええ、水をつて申しますと、平いっ時ものとおり裏長屋の婆くみさんが汲こみ込

で行つたと仰有るんで、へい、もう根っから役に立ちません。」と膝を擦つたり、天窓を搔いたり。

「へい、何でございまして、その、」

「何がどうおしなのさ、」とお嬢さん人の悪い。

愛吉はまた慌てて、

「その、何でございまして、へい。」

「佃島のは達者かい。」

「ええ阿母でございますか、ええ、ぴんぴんいたしております。ええ毎日のようにお伺い申し上げませんが、いづれでもそう申しちやあね、済まないツて言いますんでございますが、ああして一人で店を行つておりますし、それにこの頃じゃあ、度々上ると、お夏様が氣を揉んでお構い遊ばして、却つてお邪魔だからと、こんなに申しまして、へい。」

「そうかい、お前がちよいちよい来てくれるんだもの。佃島からは大変だ、今度逢つたら宜しくと申してくんなよ。」

「難有うございます、私はどうもちつとも御用にや立ちませんで、ほんのもうお嬢様の癩

癩いんしゃく、」

途端にお夏が帳場格子をコトコトと叩いて気を着けた。振向くと眉を顰ひそめて、かぶりを振つて見せたので、

「癩、」と行詰り、

「癩……癩なんぞお起しなすつちやあ不可いけません、紋床の親方なんぞも申しますが、氣永に御養生なさいませんと、お焦じれなさるのは一番毒ですつて、」といいかけて、額の汗を拭ぬぐいながら、愛吉は這身はいみになり、暗い蘆戸よしどを覗のぞき入れるようにして、

「もし御新造ごしんぞさま様え。」

ややあつて、

「あいよ。」

「そして早くよくおんなすつて、またお襟でもあたらして下さいまし、そうまずくはありませんか、剃かみそり刀だけは御用に立ちます。」としんみりする。

「涼しくなつたら可かろうと思うよ、今夜あたりは余程よつほど心持が可いようだよ。」
しばらく言ことばが途絶えたが、

「お夏や。」

「母様。」

「先刻さつきうとうとしていると、戸外おもてが大分騒だいぶんがしかつたようだっけ、」

愛吉はぎよつとして、また頸うなじを縮すくめ、

「そうら。」

「何？ あれは。」

四十五

「何でございますか、向うの嘉吉とこさんの所の婆とこさんが気が狂ふれて戸外おもてへ飛び出したもんですから、皆みんなで取押みえるツて騒さわいだんですよ。」

とお夏は自若にがわらいとしていつて真顔で居る、愛吉は苦にが笑わらい、また苦笑。

「そうかい、飛んだこツたね、そしてどうなりました。」

「火事だ火事だといって表町の方へ駆出して行きましたっけ、しばらくすると角の交番のお巡査まわりさんが連れて戻りましたよ。」

自分かかり合のことは丸抜にして言い紛らした。お夏は母親の前を繕ったのであるが、

しかし事実で。

先刻さつきちようど来合せた愛吉が、常に口にするよう、お夏の癩癩を引受けて、町内の人々と言いい争いい、すわや、掴つか合あの始はりそうになつた時、あたかも可かし、婆ばを捕とえて、かの嬰あかんぼ児こを抱かかいた女房にようぼうを従したがえて、嘉吉けきちの宅たくへ届とけるため、角かくの交ま番ばんから出張しやうちやうしたのか、見ると騒動さわどう、コヤコヤと叱とり留とどめて、所得税ととせうぜいを納とめる者ものまで入交いりまつて、腕力うでぢから沙汰さたは、おい、何事なにごとじやい。

双方ふたう聞合きかせて、仔細しさいが分わると、仕手方しあての先見明あきらなり、杖つゑの差配さあさえ取上とげそうもないことを、いいかんぞ洋サアベル刀うなずが領うくべき。

各々めいめい自分勝手じぶんかたてな迷信めいしんから、他人たにんの持物もつぶつを侵おそうとする、それも方角かたかくが悪いといつて、掃溜ほうりゅうの置場所おきばしよを変かえよとでも謂いうことか、鶏とりにを殺ころそうとは沙汰さたの限り。

なお人一人ひとひとり、それがためにと申立まをてるが、鶏とりにの宵よいなき啼なで氣きが違ちがうほどの者は、犬いぬが吠わえると氣絶きせつをしよう、理非りひを論ろんずる次第しだいでない。火事かじだ、火事かじだと駆かけ廻まわつて、いや火ひの玉たまのような奴やつ、かえつてその方が物騒ものさわじや、家内けい内の者もの注意ちうい怠たいるな、一同いどうの者もの、きつと叱とり置おくぞ、早々はやはや引取ひきとりませい、とお捌さばきあり。

あつちでもこつちでもぶつぶつがらから、口小言くちこごやら格子かぢの音ね。靴くつの響ひびきが遠とほざかつて、

この横町は静しずかになつたが、嘉吉が家ではなおばたばたするので、うるさいと謂つて、お夏が半はん部ぶを愛吉に下おろさした、その内に蔵人は旧もとの閨ねや、煙管きせるもそつと、母親の枕許へ、それで事こと済ずみとなつたのであるが、寐ねつきなり殊やまいに病やまいの疲れ、知らぬと思つていた母親に尋ねられて、お夏は落着いても、胸は騒さわいだのであるけれども、これも案ずるより産むが安かつた。

「愛吉、」

「ええ、」

無言で目を合せていて、やがてのこと。

「あの、母様おつかさん。」

黙つて返事がないから、

「寐ねなすつたよ。」

眼まなこを睜こみつて呼い吸きを凝こらした、愛吉は吻ほっとばかり、

「可いい塩梅あんばい、確たしかですか。」とそつという。

「始終すやすやしていらつしやる、先刻さつぎもよく寐ねていなすつた様だつて。」

「それであの煙管などを持出して、ほんとうにあれを揮舞ふりまわすつもりでございましたか。」

「むむ、」とお夏は打領うちうなずく。

愛吉驚いた風で、

「途方もねえ。」

「私にだって一人や二人は打ぶてようじやあないか。」

「飛んでもねえ。」

お夏は澄したもので、

「不可いけないかしら？」

「不可いけないたって、可いけないたって、そんな身体からだで、あの中へ揉もみ込まれて、串じょうだん戯だんじゃアありません。髪の毛でもつかまったらどうします。」

「まあ、」

「ええ？」

「そうね。」とわけもなく合が点てんする。

愛吉は乗出して、

「呑のん気ぎじゃあ困こまりますな。」

串じょうだん戯だんじゃアあり

四十六

「だから私がいつでも言うんじやございませんか、荒いことは軍鶏と私とで引受ますッて。ですから私におつしやるまで、我慢をしていなさるなけりや不可ません、まったくですよ。御新造様がどんなに心配をなさるか知れませんが、可うがすかい。」

「それでも打棄つて置くと殺されるじやあないか、鶏を寄越せつて謂うんだもの。」

「そりやもう。いえ、濟んだ事は仕方がありませんが、これからもあることです、これらの事ですよ。だつて先刻も私が来合せましたから宜かつたようなもの、どうして立至つた場合なら、貴女一人で叶いつこがありますか。どうせ叶わねえので見りや、怪我なんぞなさらない方が割方でございましょう、威張つたつて婦人だ、何をし得るもんですかねえ、」

「はい、さようでございますよ。」

「そら、御覧なさい。」と愛吉は説破し得たりという顔であつた。

「愛吉、」

「へい。」

「私が来たから可愛いようなものだと、お言いだがね。」

「ええ、さようさ。」

「私はそうとは思いません、」と莞爾にこにこ々々する。

怪訝けげんな顔色かおつきで、

「はてね。」

「私は巡査おまわりさんが見えたからそれで助かったと思いますよ。」

「や、成程。」

「どうだい。」

「へへへへへへへ、」ひとつと「言もごぎなく、……」

続けさまに天窓あたまを搔き、

「ですがね、お嬢さん。」

「ああ。」

「私も深川のお宅へ泣込んで参りました時のように、いつも弱くばかしはごぎいませぬぜ。わっし

あの頃は何でもこう二三人とは謂いませぬや、一人でも向うへ廻して、わツというと、」

愛吉はぎよツとする仕方をして、

「もう目がくらみました。何、どんな目に合おうかと危険だから塞ぐんで、卑怯に生命が惜いと思うんじゃないやありませんけれども、さぞ痛かろうと、あらづもりをするんでさ。」

「まあ、」

「もつとも、何ですか、一寸さきは分らないといった工合で、からだらしがありませんでしたが、段々馴れて来てお前さん、この頃じゃあ、立身になりましよう、喧嘩の虫が声を懸ると、それから明るくなりますぜ。そら拳固だ、どっこい足蹴だ、おつとその手を食うものか、その内に一人つんのめるね、ざまあ見やがれと、一々合点が出来ますだろう。どうです、強くなった証拠ですぜ。親方も言いましたつけ、撲りあい目目を塞がないようになりや、喧嘩流の折紙だって、もうちつと年紀を取って功を積んで来ると、極意皆伝奥許と相成ります。へ、」

「おやおやそうすると。」

「喧嘩をしませんとさ。」

「何、」

「極意皆伝奥許というのは喧嘩をしない事ですとさ、何のこつた詰らない。」

と愛吉は何か詰らなそう。

「ほんとうに詰らない、」

「いえ、ところが私にやあ不可ません、お嬢さんなんざ何でも分つていなさるんだから、はじめから幾らも皆伝になられます、荒つぽい気をお出しなすつちやあ不可ませんぜ。」

「ああ、だからお前も喧嘩の話はおよし、お前の話というときつと喧嘩の事だよ。」

と淡泊あつさりしたことを謂いながら、物足りなそうな、済まぬらしい、愛吉の様子を眺めて、もの優しく、

「おもしろい話をお聞かせな、私も淋さみしいからゆつくりおし。そして、煙草たばこがなくば上げようか。」

四十七

愛吉は店の箱火鉢を引張り寄せ、叩き曲げた真鍮しんちゆうの煙管きせるを構え、膝頭ひざがしらで、油紙の破れた煙草入の中を搔廻しながら少し傾き、

「ト、おもしろい談はなし？ 鯰なますが許とこのかのお米が身の上……ありや確たしかもう御存じでございましてね。」

「ああ、二三度聞いたよ、可哀相だわ、おもしろくはないよ。」

「さてと、困ったな、喧嘩が禁制となつて酔払いがお氣に入らずとあつては、前座種切れだ。」

と吸いつけ、

「お待ちなさい、お米が身の上は可哀相と極つて、長崎から強飯こわめしが長い話と極つた処で、これがおもしろいと形かたのついた話といつてはありますまい。私わつしが一度甲州街道の府中に行つていたことがあります。

よくはやりましたが、新店しんみせで、親方おやぢというのが少いので、女房かみさんもまだ出来たてでもんですから、職人は欲しい、世話はしたいが一所に居るのはちと工合が悪い、内には妹と厄介な叔母おばとが居て、ちようど別に一軒借りようという処で、家は見つかつている、所帯道具なんぞ、一式調い次第あとから繰込むとするから、私に先へ行つて夜だけ泊つていてくれろとこういふ話です。

宜ようございますとも。早速その晩から煎餅蒲団せんべいぶとん一枚ずつ抱えて寝に行きました。木戸があつて玄関まであつて室数まかずが七ツばかり、十畳敷の座敷には袋戸棚、床の間づき、時代にてらてら艶つやが着いて戸棚の戸なんぞは、金箔きんぱくを置いて白鷺しらぎが描いてあろうという大し

たもんです。

私は日附の家へ瀬踏に使われたんだとは気が着きませんや。

床屋風情にやあ過ぎたものを借りやあがった、襖の引手一個引剥しても、いつかど飲代が出来ると思つて、薄ら寒い時分です、深川のお邸があんなになりました、同年の秋なんです。

その十畳敷の真中で、昆布巻を極めて手足をのびのびと遣りましたっけ。」

愛吉は吸殻を払いて、

「可うごすかい、さあ寝られませんか。総鎮守の風の音が聞えますね、玉川の流は響きますね、遠くじゃあ、ばったんばったん機織の夜延でしょう、淋いッたらありません。

悪くするとこりや狐でも鳴きそうだ、弱りましたね、さよう、一時頃でございましたらうか。」

聞惚れていたお夏は急にあどけないことをいった。

「出たかい。」

余り唐突に聞かれたから、愛吉まごついて、

「へい、何でございます。」

「いずれ何か。」

「最初は、庭に手水鉢ちようずばちがあります、その雨戸がカタリといいましたつけ、縁側を誰か歩あ行るいて来ます、変だと思つてる内に、広間の前の処で跫あしおと音が留やんだんです。へい、」といつて一ツ自分で領いた。

「それだけ。」

「どういたしましたして、これからなんですさ。しばらくすると、すつと障子を開けましたが、私が枕もたを持も上げる時には、もう畳を三畳ばかりすらすらと歩ある行るいて来ました。

見ると婦人おんな。

はてな、盗とられる物はなし、戸締りはして置かないから、店から用があつて来たのかしらと、ひよいと見ると、どう仕つかまつり……床屋の妹こがらというのはちよいと娘柄よは佳ようございましてけれど、左の頬ほっぺた辺あたに痣あざがあつて第一円顔なんです。」

四十八

「よく演劇しげいでしたり、画えに描えいたりするのは腰こしから下が霧きりのようになってましよう。

私わつしがその時見ましたのは、どうして、大した結構なものですぜ。

目鼻立のはつきりとした、面長で、整然ちやんとした高島田、品は知りませんが、よろけた豎た縞てしまの薄いお納戸の着物で、しょんぼり枕許へ立つたんです。

時刻は時刻だし、場所は場所ですし、第一、その玉がまた、府中あたりに見ようたつて見られるのじやありません。何しろお嬢様、三階建だちの青楼おちややの女郎が襟のかかった双子ふたごの半纏はんてんか何かで店を張ろうという処ですもの。

歌舞伎座こびきちやうのすつぽんから糶せりあが上りそうな美しいんだから、驚きましたの何のつて、ワツともきやつともまさかに声を上げはしません、一番生命いのちがけで、むっくり起上ると、フイと背後うしろむき向むになつて、風を切るようにすつと引返しました。その時は背筋のあたり、真ま白しろな襟を艶つやつや々まげした鬚まげね、毛筋もならべたほどに見えましたつけ、もう消えたんです。

あくる朝はぼんやりでどうも考えて見ると夢のよう、早い処でまず、その消えたあとのことを思出すと、何しろ真暗まつくらなんでございましょう。夢でなくツて顔色がどうの、着もの色がどうの、鬚かたの形がこうのと、分るわけがなからうじやありませんか。

夢とすると話が出来ない、いかに田舎稼かせぎに出ていたつて、野郎の癖しんぞに新造しんぞの夢でもありませんまい。これが山賊に出逢つて一貫投げ出したとでもいう事なら、意気地がねえたつて

茶話にやなりまさ。

黙っていました。

その晩、また昨夜ゆうべのように、燧火マツチだけは枕頭まくらもとへ置いて火の用心あかりに灯は消して寝たんですが。

同おなじじこく一刻おなじじこくになりますと、雨戸がカタリ、ほんの、カタリと聞えますだけなんで、縁側にあしおと登音がしましよう。枕を上げて見たばかりで、何故なぜだか起返る事が出来ません。

その女もしばらく立っていましたつけ、別に何という事は無しに、縁側の障子の際で、肩あたりの辺が消えますとね、棧が見えて高島田もなくなりました。」

お夏は半ば聞棄てて、気を入れるともなく返事ばかりして、帳面をあつちこつちばらばらと返していたが、この時一点も疑う色のない顔を上げた。

「奇代だわねえ。」

「ええ、まだまだそれが三晩四晩と続きましたね、段々気味が悪くなつて来るせいですか、さあ、おいでなすつたと思うと天窓あたまから慄然ぞっとして、圧おしを置かれるような塩梅あんばいで動くこともありません。

五日経たつてからお約束の、叔母と、妹というのが引移りました。けれども、そら私わっしに瀬

踏をさした位なんですから、そうやって日が経っても、何にもいわないについて大丈夫とは思ったでしょうが、まだ安心がなりますまい、そこで段取は抜、所帯道具は運ばないでまず泊りに来たもんです。

次の室の六畳に二人抱ッこをして寝ましたつけよ。お前さん昨夜は大層うなされてねと、夜が明けてから吐しまさ。さあいよいよだ、とぎよつとしたけれど、何時頃にと、惚けて尋ねますと、ちようど刻限が合ってるんで。

ままよ、こうなりや百年目だ。新造に取着かれる覚はないから、別に殺そうというのじやあなかりう、生命に別条がないと極りや、大威張りの江戸兎、
「吻々々々、」

「ほんとうに度胸を据えました、いえ、大したことじやありません。何か化けて出る因縁があるに相違ないと思いましたがからね、思い切つて聞いて試ようと、さあ、事が極ると日の暮れるのが待遠いよう。」

四十九

「婦人二人は、また日が暮れると泊りに来ました、いい工合に青緡を少々握りましたもんですから、宵の内に二合半呷りつけて、寢床に潜り込んで待つてると、案の定、刻限も違えず、雨戸カタリ。」

ちらりと姿が見えたが勝負で、私あ目を瞑つて、江戸兎だ、お前さん何の用だ、と言いました。

すると莞爾笑つたから凄うございませ。少し俯向いてこう胸の処に袖を重ねていた、それをね、両方へ開いたでしよう。

突然、大蛇の天頭でも頭れるかと思うと、そうじゃありません。これを預けたさに、と小さな声で謂いましたね。青い襦袢の中から、細い手を差延べたから、何か知らんが大変だ、幽霊の押着ものなんざ恐い、突退けようと向うへ突出したこの手ツ首の細い処へ、」

愛吉は指の環で左の手首を握りながら、

「一本きらきらする銀の簪、脚を割つて突きすように挟んだんです。確かに、可うござんすか。確かに、という口の下、ぐいぐいとその簪の脚が緊りましてね、ここが不思議ですよ、その痛いことと謂つたら。思わずキャツという、愛吉さん愛吉さんと呼びますわ、次の

室で二人の音がするから、気が着きますと、私は床の上へ坐り直つて、現にもお嬢さん、
こうやつて左の手ツ首をおさ圧えていたんです。

恐しいことには、夜があけても何だか脈みやくどころ 処ところが冷たいようで、ずきずき痛みましたか
ら堪りません。

打明けては言いませんでしたけれども、二晩続けて私がわつしうな魘されたのを聞いたんで、婦人
二人はもう厭いやだとかぶりを振ります。

有耶無耶の内は、夢だろぐらいで私も我慢をしましたけれども、そうどうも手首へ極
印を打たれちゃあ辛抱がなりません。とても次の晩からはその家へは寝られませんで、形かた
なしになりましたが、私あはじめてです、いまだに不思議に思いますがね。」

「それツきり逢わなかつたの。」

「ええ、もう木賃の方へ逃げました。」

「惜しいことをしたねえ、何かお前に頼みごとでもあつたんじゃあないか、それでなくつ
てもまた来た時を待っていて、分わけを聞けば可よかつたのにね。」

と身に染みて、お夏は残惜しそうな風情であつた。

「今で見ますと、私も惜おしいことをしたと思います、ですがお嬢さん、その場に臨んで御覽

なさい、その気味の悪いことといつちやあ、口で謂うようなものではないんですから。」

お夏はこれを聞取らなかつたほど、何か考えていたが、

「幾歳、」

「十八九で、」

「おとし昨年のことだつて、」

「おとし昨年でございますよ。」

「おないどし昨年十八九、私と同一年ぐらいだねえ？」

「飛んだことを、たとえ譬になすつちやあ不可いけません。」と驚いて言う。

お夏は自若として、

「かんざしそして簪を預けたいといつたつて、十八九で綺麗な女で、可愛らしいお化ばけだこと。ほんとに可愛いじゃあないかねえ、」とものおもい、もの思う様子で謂いながら、つむりへ手を遣ると、さしていた銀脚の簪を抜いて取つた。

「愛吉、ちよいとお見せな、手を。」

「へい、」

「こんな風に預けたの。」と、そのまま手首へはさんだが、よくは入らないから耳の処へ

力を入れた、銀は柔かく二ツに分れて、愛吉の手は帳場格子の上に結いつけられたようになったが、双方無言で、やがて愛吉はぶるぶると震えた。

五十

「取つてお置き、それをお前に上げましょう。」とお夏は事もなげに打微笑み、

「それであのお化の念が届くんだわ。」とあつけに取られた愛吉の顔をさも嬉しそうに眺めたが、不意に色をかえて、お夏はちよつと簪を抜いた髪に、手を触れて見て屹とした。

この時の容貌は、過般深川の橋の上で、女中に取巻かれて火を避けたのを愛吉が見たそれのごとく、ほとんど侵すべからざる、威厳のあるものであった。しかもあきらかに一片の懸念の佛は、美しい眉宇の間にあらわれたのである。お夏は神に誓つて、戯にもかかる挙動をすべき身ではないのであった。

しかるに愛吉が状もまた極めて案外。

その手も引かず渠は色を正して、やや開き直つたという体で、

「お嬢様、それじゃあこれをお記念に頂きましょう。」

「え。」

「お嬢さん、わっし私は何とも申し上げようはございません。」と片手をそれへ、つむり頭をさげたが、声の調子も変っている。

「私もお嬢さん、あなたに取つちやかたきあ敵でございます。へい、とんでもない、謂いわばその獅子身中の虫と謂うんで、こんな分らずやで何にも存じませんもんですから、愛吉々々とおつしやつて下さるのを、可い事にして、かんしやく癩癩は引請けましたなんぞと、うぬ汝が勝手な熱を吹いちやあ、ちよいちよいお出入をするもんですから、こんな役やくぎ雑ものど口をお利きなさりますばツかりで、お嬢様、あなたに人が後指を指すんです。知らない内はから呑気で、一向澄したものでおりましたが、人から気をつけられてからだ身体を持つて行き処のないほど、驚いたんでございますよ。

まあどの位、こちら様に害をなすか、こん畜生、すう数が知れねえんで、へい。実に相済みません、何てつておわびのいたしようもないのでございます。

今晚も実は一言ひとこと申上げて、おいとまごい暇乞をしましうと、その事で上りましたが、いつにだしぬけ変らず愛吉々々とおつしやるので、つい言い出しかねておりました。

唐突にこんな事をやぶ敷から棒、気が違つたかとお思いなましようが、お嬢さん。

あなたも何にも御存じなし、私もちつとも知らないでおります内に、あなたの御縁談が
一ツ打破ぶちこわれたんでございまして。

これが並ひととおり一ひととおり通とほのことじやアありませんや。対手あいてがまたその辺に對手欲しやでうろつ
いてる出来星けいちの吝けちな野郎じやありません、汝うぬが身体からださえ打う棄ちつてる私ですもの、大臣
だつて、大将だつて、大金持だつて何だつて、糸瓜へちまとも思わねえのに、こればかりは大の
鼠ひいき貞まことで、心底から惚ほれています山の井の若先生。」

「愛吉!」

「お待ちなさい、それだ、分つてます。京橋から築地、この日本橋、神田、下谷したや、一度見
た親おやはこういう人をお思わねえものはありますまい。今度あなたの代りに極きまりました縁ゆかりの
先方さきの、山河内の奥方おくてえ、あの癩たむしの大年増としぞうなんざ、断食むすめをしないばかりに、女むすめを押し
ようといつて騒さわいだと申すんで。

その若先生が、お嬢さん、あなたを望みで、影日向心ひなたを入れていたというのに、何と私
が着絡つきまとつてるばかりに、控ひかえたというじやありませんか。」

「愛吉!」

「済みません、分つてます、分つてます。しかもこういう事をはじめて聞きましたのが、

先達てお嬢さんが口惜くやしがつておいでなすつた、根岸の鴨川一件だ。鼻元思案のお前さきぼしりに私が暴あばれ込んで、ひツくりかえつて可い心持で飲みました晩ですぜ。それと分つてからはお顔を見るにも御不便ごふびんで、上りかねましたから、こんなに御不沙汰にもなりましたが、もう一度問直そうと、山の井先生がその時は、自分で鴨川の許ところへ行つたつていうんです。それが頼まれもせずいいつけもなさらない、お嬢さんの名を出して、私が暴れて帰つたあとだつた、というじやありませんか。

口惜くやしいのは、お嬢さんに団扇うちわで煽あおがせた時がと言うと、あの鴨川めが肝きも入いりで、山河内の娘に見合をさせるのに、先生を呼んだ日だと謂かたいますわ。敵かただもの、おまけに、私が帰つたあとで、あなたの相談がどうなります。それに、まだ、そんな事じやあない、といいますのはあの若先生は、お嬢さん、あなたが誰にもおつしやらないで、心で思つていらつしやる、……」

「愛吉！」

「いいえ、分つてます。誰も知りませんが、これを、いつて聞かしたのは、竹永丹平という、新聞社の探訪員。」

明治三十三（一九〇〇）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

初出：「大阪毎日新聞」

1900（明治33）年8月9日～9月27日

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年3月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三枚続

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>